

勇者パーティを、こっ  
ぴどく追放されたけど、  
改造呪術の《グリッチ  
=コード》が覚醒した  
ため、生活魔法で最強  
を目指します！

手嶋ゆっきー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「なあ、リイト。もう分かったろ。俺の勇者パーティにお前は無理だ。追放だ」

勇者パーティに所属していたリイトは勇者候補であるグスタフに、ある日突然、そう言われ追放されてしまった。

リイトはグリッチ：コードというスキルを所持していた。

しかし、誰も聞いたことがないもので、グスタフは、外れスキルだと決めつけていたのだ。

実際は、簡単な生活魔法でさえ、凶悪な魔法に改造する反則的なスキルであったのに。その上、グスタフはマエリスに手を出し寝取りを実行しようとしていたが、うまくい

かず彼女と仲が良いリイトを追い出したのだ。

リイトが追放された日の夜、状況が一変する。

翌朝起きると、彼の横に六歳くらいの少女が眠っていた。

少女は殆ど話さなかったが、彼女の声は以前からリイトの頭の中に響いていたものとそっくりだ。

《グリッチ・コード》というスキルと少女の関係が次第に明らかになっていく。

一方、リイトを追いだし、マエリスを手に入れようとするグスタフだったが、彼は次第に落ちぶれていく。

グスタフは次第に王国から見放され、リイトに対する恨みを募らせるのだった。

※小説家になろう様等でも掲載しています

# 目次

## 第一章 謎の少女

第01話 勇者パーティを追放されて

しまった | 1

第02話 裸の少女と一緒に寝ていた

ら能力が覚醒した | 5

第03話 ただの生活魔法程度の威力

くVS 大狼《ウォーグウルフ》 | 14

14

第04話 獲得した経験値を消費して

すべきこと | 22

第05話 反則呪術の一覧を見てみよ

う | 28

第06話 雑魚魔術師と言われて

37

第07話 水(汁)を飲んで | VS

傭兵部隊 | 44

第08話 閑話 勇者様は自分でして

ください | sideマエリス

52

第09話 女の子に鑑定魔法を使った

結果…… | 59

第10話 百発百中の魔法 | VS

巨鬼《オーガ・ジャイアント》 | 69

69

第二章 幼馴染みの聖女

	第11話	幼馴染みと一緒に、夜を過	第18話	暗殺者のナイフ　　VS
	(す)……	(1)	上位悪霊《ワイト》	VS
	第12話	幼馴染みと一緒に、夜を過	第19話	新たな魔法　　VS　　上位
	(す)……	(2)	悪霊《ワイト》	VS
135	第13話	そういう関係では	第20話	年上の女性に素敵ねと言わ
	第14話	そのザマは何よ? (1)	れて…… (1)	157
	sideマエリス	110	第21話	年上の女性に素敵ねと言わ
	第15話	そのザマは何よ? (2)	れて…… (2)	168
	sideマエリス	115	第22話	お姫様の目を覚ますために
	第16話	幸せな夜と聖女の儀式	必要なのは、王子様の……	175
	sideマエリス	122	第23話	もう二度と、頭を撫でても
135	第17話	ダンジョン探索開始	らえなくても、あなたに向けたもの	
				183

	第24話	甘えてくる幼馴染みをどうするか……	くVS	スカルドラゴンく	189				
	第25話	あなたを信じて	くVS		235	第31話	王女殿下に招かれて		227
	スカルドラゴンく				196	第32話	記憶を辿って		243
	第26話	勇者候補に迫る破滅	くV			第33話	蘇る記憶と願い		
S	魔王く				202	de	チョコ		249
	第三章	願い				第34話	立ち向かう意思(1)	くV	
	第27話	王女殿下の謝罪			209	S	勇者候補	グスタフ	魔王く
	第28話	断罪される勇者(1)			268				
side	カトレーヌ				218	第35話	立ち向かう意思(2)	くV	
	第29話	断罪される勇者(2)				S	勇者候補	グスタフ	魔王く
side	カトレーヌ				223				
					275				

第30話 【軽修理】の魔法で服を改造

してみよう

第36話 最終話 とても嬉しかった  
し、とてもぼかぼかしてた。 — 284

第37話 エピローグ 願いの破棄  
290

第38話 エピローグ 幸せな食卓

— side チコ — 295

第39話 エピローグ 《グリッチ》

コード》 — 309





## 第一章 謎の少女

### 第01話 勇者パーティを追放されてしまった

「もう分かったろ。俺の勇者パーティにお前は無理だ。追放するわ」

唐突に、勇者候補であるグスタフが言う。

「僕をパーティの輪から遠ざけたと思ったら……どういうことですか？」

「今が丁度良いんだよ。ダンジョン攻略も終わって帰る時だしな」

リーダーであり勇者候補のグスタフが薄ら笑いを浮かべて言った。

彼は今年で二十歳。僕の四つ歳上だ。

「理由を教えてください」

「俺が見つけた魔術師を新しく雇うことにしてな。お荷物のお前なんか要らないんだ」

よ。初級の——生活魔法しか覚ええないお前なんか」

「……そんな」

「この後、パーティのみんなに話をする。リイト、お前の幼馴染みのマエリスが反対するかもしれないが、『リイトは実力不足を恥じて去ることにした』と言うつもりだ」

グスタフは、妙に口元を歪めている。

僕を見下しているのは感じていたし、今日は一層嫌な感じが強い。

マエリスは僕と同じ孤児院で育った幼馴染みだ。

彼女はお告げを受け、聖女候補とされていた。

グスタフは僕の肩に手を置く。

「そもそも先日の儀式で告げられた職階級は何だ？ 俺は五年前に勇者候補だと判定された。カトレーヌは暗殺者<sup>ローグ</sup>、マエリスは聖女だったな。お前は——？」

「反則呪術師<sup>グリッチヒューゴード</sup>……」

「そうだ。誰もそんなスキルや職階級<sup>クラス</sup>など聞いたことがない。どうせろくでもない外れスキルなんだろうよ。とにかくこのダンジョンを出たら、そこでお別れだ。役に立たなかったおまえは、報酬はなしだ」

その言い方は、まるで僕が何も知らないような口ぶりだった。

「今までも、元々、僕の取り分をピンハネしていたのですよね？」

「おや、知ってたのか？ まあ、王国公認の勇者パーティを抜けるお前が、今さら何を言っても誰も話を聞かないだろうよ。勇者候補と役立たずのスキル使い、どっちを信じるか、おまえもわかるだろう。」

「う……」

「……でお別れだ。皆にお前の離脱を伝えたが誰も反対などしなかった。お前の幼馴染みのマエリスは俺が寝取らせていただく」

「は？ 何を言ってるのですか——」

寝取る、か。

そうか。グスタフはそれが目的だったのか。

一向になびかないマエリスに対し、彼女と仲が良い僕が邪魔になったのだ。

誰も反対しなかったというのも嘘なのかもしれない。

マエリスだけは反対してくれたと信じたいが、もうそれを確かめる術は無い。

「マア、もし追いかけて来るようなら、今度こそ俺が劍の錆さびにしてやる」

初級魔法しか使えず劍を使えない僕がどんなに頑張っても、勇者候補とはいえ高い能力を持つグスタフでは勝負にならないだろう。

グスタフは脅すように言うど僕に背を向け去って行き、僕だけが残されたのだった。僕は自分の心配よりも、彼らが少し心配になった。

グスタフの妙に急いで僕を追い出すような様子。

本当に僕は役に立っていなかったのか？

僕がいなくなつて、今までと同じようにパーティが成り立つのか？

マエリスのことが気がかりだ。

——グスタフは、ライトを失つたことをじわじわと後悔することになる。

しかし、気付いた時には、時既に遅し。

遅すぎたのだった。

## 第02話 裸の少女と一緒に寝ていたら能力が覚醒した

僕は一人になった後街道を歩き続け、夜になる頃には小さな街に辿り着いた。  
宿屋に泊まることにする。

食事が喉を通らず、空腹のまま眠りにつく。

いつも一緒にいるのが当たり前だったマエリスと離れ離れ  
パーティを外された寂しさと悔しさが襲ってくる。

「勇者パーティか……」

そうつぶやくと、次第に意識が遠のいていく――。

まどろむ中で、僕はまだパーティにいた頃のことを思い出す。

ダンジョン内で、ジャイアントスライダー大グモと出会った時のこと。

皆が、敵と向きあい、それぞれの役割を果たしていく。

戦闘の最中に、以前から僕だけに聞こえる声があった。

雑音混じりの少女の声だ。

『スキル……剣聖……強化シマ……』

『YES!!』

『魔……法……麻痺……強化シ……ス』

『YES!!』

『魔法……傷治癒……ハツドウ支援……』

『YES!!』

僕はYESと答え続ける。

でも、これがどんな効果を及ぼしているのか分からない。

なぜかマエリスだけが振り返り、ありがとうと伝えてくれた。

他のメンバーは気にもしてくれない。

この話を信じてくれたのもマエリスだけだった。

そんなことを思い出していると、次第に僕の意識は闇の底に沈んでいって……真っ暗になった。

——夢を見た。

夢の中で、僕は眠っている。

やがて、誰かが近づいてくる気配を感じる。

足音や気配で分かった。マエリスだ。

マエリスと言葉を交わしたい。

そう思うのだけど、僕は体を動かせない。

マエリスの気配がさらに近づく。

「ライト。話を聞いたわ。私はあなたがパーティからいなくなると聞いて反対したけど、受け入れられなかった。でも、私はライトが強くなることを知っている」

額に温かいものが触れ、わずかな吐息が感じられた。

マエリスが僕にキスをしている？

彼女の息づかいは遠のいていった。

強くなりたい。

夢の中で願った瞬間、僕の頭の中で響く声があった。

『……覚醒。私は、グリッチⅡコード……』

これまで時々聞こえていた、雑音混じりだった少女の声だ。

今はハッキリと聞こえた。

僕の職階級クラスのスキルが変化している……？

『複製体が統一されました』

『封印が解除されました』

『《グリッチⅡコード》が再起動しました』

『実体化の封印が解除されました』

『実体化を行います』

『規定の経験値を確認しました。全て《グリッチⅡコード》の強化に使用します』

『特定種別魔法の反則強化能力を獲得しました』



《グリッチIIコード》の再起動？

魔法の反則強化を獲得？

わけが分からず混乱する。

でも決して悪いことは起きて無さそうだ。

少女の声が収まる。

僕の意識は再び、深い闇の中に落ちていった……。

朝。

目を開けると、眩しい光が飛び込んでくる。

不思議な夢を見たな。

マエリスと《グリッチIIコード》の声。

一体何だったんだろう？

それにしても、昨日の夜は気分が落ちこんでいたけど、今は不思議と前向きな気分だ。  
ん？

布団の中に妙に温かく、柔らかなものを感じる。

「すう……すう」

寢息が聞こえる。

この温もりといい、寢息といい誰かいるのか？ 同じ布団の中に？

誰かと同衾している？

恐る恐る、寢息の方向を見た。

そこには六歳くらいの少女が僕に抱きつくようにして眠っている。

可愛らしいその顔は穏やかで、無邪気で、幸せそうだ。

っていうか。

誰？

微妙に見覚えがあるような気もするけど、知らないぞ。こんな子……。

マエリスに似ていると言えば似ているかも。

でも、肩くらいまである髪の毛の色は僕と同じだし。

よくわかんないな。

ん？

滑らかな肌の感触が、体温が、柔らかさが、彼女から伝わってくる。

恐る恐る、布団をめくる僕。

「は？」

謎の少女の体を見て、そつと布団を戻す。

なんと、彼女は何も身につけていないではないか。

素っ裸だ。

昨日は僕一人で眠ったはずだ。

いつの間にかこの部屋に迷い込んできたのだろうか？

……裸で？

謎だ。謎の少女だ。

マエリスにこんなところ見られたら何を言われるのか分からないなどと、不要な心配をしたりする。

僕は謎の少女を残し、そつとベッドから退散した。

が、振動が伝わってしまったのか、彼女はぱちりと目を開ける。

そして僕の顔を見ると、もごもごと口を動かした。

「リイト？」

「え？ 僕の名前を知ってるの？」

「リイト」

謎の少女はわずかに頬を染め、僕を見て微笑んだ。

この声は、今まで頭に響いていたり、夢で聞いた少女の声と同じだ。

もつとも、夢の中の声と比べて随分幼いけど。

うーん。いったいこの子は一体誰なんだ……？

外から迷い込んできたのか？

起き上がったってもニコニコと僕をみて、やたらバタバタとくつついてくるんですけど。

取り急ぎ、服を手に入れさせる。

その後食堂や酒場など村の中を歩き、謎の少女の身元を調べようとしたが手がかりは無かった。

この村は小さくて神殿も孤児院も無い。

これからどうしよう。

少女を見捨てる……のはさすがに気が引ける。

幸い、勇者パーティを外れた僕には、少しの資金と多大な時間があった。  
だったら……。

「ここからそう遠くないし、一緒に僕の育った街に行ってみようか？」

僕の問いに、少女は満面の笑みで頷いた。

「じゃあ、決まりだ」

早速生まれ故郷に向うことにする。

その孤児院——僕とマエリスがいた孤児院——に、この謎の少女のことを相談してみよう。

## 第03話 ただの生活魔法程度の威力 〽VS 大狼

## 《ウオーグウルフ》 〽

僕は寄合の馬車に乗り、移動を始める。

三日かけて移動し途中からは歩きだ。

謎の少女は年齢の割にしつかりしており、へこたれず、いつも僕の横でニコニコとしていた。

肩に届く程度の長さの髪の毛が美しい。

そんなこんなで、もうすぐ目的の街に差し掛かろうと言うとき――。

懐かしい景色の街道を歩いていると、その横、草原の方から人影がこつちに向かって走ってきていた。

見覚えがある。

僕の少し歳下、十四歳の女の子。アリナだ。

「アリナ？」

「もしかしてリイト？ リイト兄さん!! 怖かったよう!」

アリナが、がばつと抱きついてきた。

彼女は孤児院にいる子供を世話してくれていた女の子だ。

歳上と言うだけで僕を兄と呼ぶ癖は相変わらずだ。

しかしアリナの顔は埃で汚れ、服は所々破れただ事じやない様子に驚く。

「どうした？ こんなところを一人で」

「それが、獣に追いかけられていてえ」

見ると、彼女がやってきた方向に狼より二回りくらい大きい大<sup>ウォーグウルフ</sup>狼という獣<sup>けもの</sup>の群<sup>むれ</sup>が見えた。

十数匹。こんな昼間にこんな街の近くに、どうして？

街の方から、カンカンカンと警告の鐘の音が聞こえる。

誰かが大狼の群に気付いたのだろう。

このままでは門が閉じられてしまう。

アリナと謎の少女を連れて街まで走るか？

街の門はもう見えている。

ふと、謎の少女を見ると、彼女は僕の手を握り「ひのまほう」と言うように口を動かした。

「火の魔法？」

僕は聞き返す。

すると、それを聞いたアリナが期待の眼差しを向けてきた。

「ライト兄さん攻撃魔法が使えるようになったの？」

【ファイアボール火球】とか、

【ファイアウォール炎の壁】とか？」

「え、えーつとね……」

僕が使えるのは攻撃魔法ではないんだよな。

あ……うん……その……期待させてすまん。

初級魔法なんだ。

生活の中でよく使うから生活魔法とも言う。



僕は心の中で謝り、「火の魔法」を唱えはじめた。

「イグニッション発火」！」

すぐに魔法が発動。かざした僕の指の先に火花がチリチリと散る。

ああ、我ながらあまりにもシヨボい。

これは燃料に火花を散らし火を起こす魔法なのだ。

「えええ……あ……いや、ライト兄さん！ 逃げよう！」

ガツカリするような声を上げ、アリナが僕を引っ張ろうとした。  
うん。しょうがない。

今のは、僕だって同じように思う。  
しかし。

『イグニッション発火』の魔法解析………終了。グレリツチ反則強化を行いますか？』

僕の頭の中に少女の声が響く。

この声が、僕自身の魔法に発動するのは初めてだ。

今までと違い、やけにはつきりと声が聞き取れる。

この声はやはりこの謎の少女のものか。

彼女を見ると、頬を赤らめ期待するように僕を見つめていて、コクリと頷いた。

僕の答えはいつも同じだ。

「YES!!」

『強化を実行……成功しました。一步下がりがら再度呪文を唱えてください』

その時、たいした魔法を発動できないと思ったのか、僕たちを舐めくさった大<sup>ウオーグウルフ</sup>狼の集

団が接近していた。

奴らが牙を剥く。

獲物を目の前に、その邪悪な目を輝かせている。

多勢に無勢。だらしなく舌を見せ、ヨダレを垂らしている。

楽勝で肉にありつけるとでも思っているのだ。

僕は頭の中に響いた言葉通り、一步下がり大声で再度呪文を唱える。

生活魔法は、ほとんど魔力を消費せず、短時間で発動できるのが特長だ。

「うおおおつ。イグニッション【発火】ツ!!」

バチバチバチ……ゴオオオオオオオオオオオオ  
!!!!!!

指の先から火花が飛び出しそれが広がっていく。

ビリビリと地面を振動させ、熱せられた空気が風を起こし、周囲の埃を巻き上げる。

「な……なんだこの火力は」

僕も驚いたが、目の前のウォーグウルフの群は、急な攻撃一つで容易くパニックになった。

余裕そうだった表情から一変、奴らの足が止まる。

今だ。僕は確実を期すために呪文を連続して発動する。

イグニッション「【発火】!」

「<sup>イグニッション</sup>発火」ツッ!

バチバチバチ……ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
 ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
 !!!!!!  
 !!!!!!

僕の指先から放たれた煌めきが増していき、小さな火花が巨大な火の玉に成長し、ウオーグウルフの群を蹴散らしていく。

まるでなぎ払うように燃やしていく。

奴らは断末魔の悲鳴を上げる暇も無く、灰になっていく。

逃げ出したウオーグウルフはいない。

その結果が全滅だ。

「す、すごい……ライト兄さん……すごいよ」

そのあまりに壮絶な様子に驚いたのか、アリナが僕に抱きつき、震える声で言った。アリナの調子の良さに苦笑いするものの、気分は悪くない。

危機を脱出できたので緊張の糸がほどけたのだろう。

それに、僕も驚いている。

僕が放つ魔法が頭の中の声に影響を受けたのは初めてだ。

これが反則呪術グリッチ||コードか。

しかしこの時目にしたのは、まだまだその片鱗に過ぎなかったのだった——。

## 第04話 獲得した経験値を消費してすべきこと

僕の頭の中に、いつもの声が響く。

『経験値を獲得しました』

『経験値を消費して《グリッチコード》の実体にかけている【誓約】<sup>ギアス</sup>術式を破壊します。術式を破壊しない場合は、<sup>レベルアップ</sup>能力向上を実施します。術式を破壊してよろしいですか？』

ん？

【誓約】<sup>ギアス</sup>の術式って。

これは呪いの一つで、例えば奴隷に対し服従の契約を課すものだ。

謎の少女を見ると、いつものように微笑んで僕を見返す。

もしかしてあまり喋らないのは、この呪いのせいかな？

当然、そんなもの答えは決まっている。

YESだ。

どういうことだ？ この子は奴隷だったのだろうか？

この状況に腹が立ってくる。

『【誓約】<sup>ギアス</sup>術式の破壊……………成功しました』

謎の少女は急に涙目になった。

ぽろぽろと涙を流し始める。

でも、顔は笑顔になっている。

僕の胸のつかえが少しだけ降りたような気がした。

「……………！ リイト……………リイト……………ありがとう……………！ ありがとう」

少女は叫びながら俺に抱きつく。

でも割とすぐに、ようやく楽に声が出るようになって安心したのか、少女はうとうととし始めた。

仕方ないのでおぶってあげた。

その様子を見ていたアリナが興味津々という様子で僕に聞いてくる。

まあ、そりゃ気になるよなあ。

「ねえ、ねえ！ その子、もしかしてリイトの子お？」

「いや、年齢を考えろ。そんなわけないよ！」

「そうねえ。でも面影があるんだけどなあ。誰なのお？ 名前はあ？」

「えつと——。どうやら《グリッチIIコード》と関係あるみたいだけどよく分からなくて……とりあえず謎の少女って呼んでる」

変なの、と文句を言いつつ、アリナは少女の頭を撫でた。

「グリッチIIコード反則呪術、それにしてもすごかったわあ……本当にあれがイグニッション【発火】の魔法？ やばす

ぎでしょ」

アリナが羨望の眼差しを緩めてくれない。

妙に照れくさいので、やめて欲しいんだが。

「ああ。僕もびつくりしている」

「すごいねえ、リイトって。それでリイトはどうして戻って来たの？ 勇者パー



「ティーはどうしたのう？」

もつともな疑問だ。

僕は簡単に経緯を話した。

勇者。パーティをクズスキル持ちだと追放されたこと。

どうやら時々中途半端ながら発動していたこと。

しかし、このスキルのことをマエリスを除いて誰も信じてくれなかったこと。

「全然外れスキルじゃないし、リイトを追放するなんてグスタフって人バカじゃないのお？」

「おいおい」

「それに、これからも強くなっていきそうなんですよ？ 《グリッチコード》のスキル自体が。やっぱりバカよ。大バカ者よ」

相変わらずアリナは思ったことをずけずけと言う。

でも、確かにスキルの解除など、もつといろいろなことができそうだ。

色々調べてみないといけない。

「確かにそうだけど、僕がパーティにいた頃はよく分からなかったし」

「でも、その声は前から聞こえててえ、みんなのスキルとかを強化らしきことはしていたんでしょ？ 最低」

「もう、今はどうでも良いよ。マエリスのことは心配だけど、すぐ聖女として認められそうだったし」

「そっか……グスタフって人の下にいるよりはいいかもねえ」

アリナは口には出さなかったものの、マエリスが勇者パーティに残ったことは不満のようだ。

「うん」

「ライトは、いつも前向きねえ。この子にも慕われているようだし。今、戻って来てくれて良かったあ。街のみんなも歓迎してくれるよお！」

今戻って来てくれて良かった？ 何か問題でも起きているのだろうか？

アリナの言葉通り、街に戻ると僕らのために軽い宴が催された。

久しぶりに見る孤児院の面々。

顔見知りの大人たちや、子供たち。

ウオーグ・ウルフ

「大 狼を倒したのを見張り台から見ていたよ！ すごかったなあ」

「あの魔法は何だ？ 見たことなかったけど」

「王都はどうだった？ どんな服が流行ってるの？」

「リイト、この時期に強くなって戻って来てくれて心強い」

などなど、その歓迎ぶりに照れてしまう。

パーティをクビになって、お金もありませんよと言うと、そんなこと気にするなと返され、ますます照れる。

でも、久しぶりに美味しいものをたらふく食べ、気の知れた人たちと話をし、僕はとても楽しい気分になったのだった。

## 第05話 反則呪術の一覧を見てみよう

楽しい宴が終わった。

夜も少し更けていたけど、僕が連れてきた少女が目を覚ましたので話をする。

「名前は？　なんて呼んだらいいかな？」

「グリッチコード？」

「うん、それは僕のスキルの名だよね……でも、一旦コードと呼ぼうか」

「コード……はいです」

結局彼女は何も覚えておらず、詳しいことは分からなかった。

ただ、少女を探しているような両親や親族はいないようだ。

だとすると、やはり孤児院に預かって貰うのが良いのだろうか？

「あたしは……リイトと一緒にいる。邪魔しないから、役に立つから……お願い」

少女がこんなお願いをしてくることに強い違和感を抱く。

僕の頭に「奴隷」のことが頭をよぎる。

あるいは記憶を封じられていたとしたら。

少し彼女と一緒に過ごしてみても、生活が難しそうなら改めて孤児院に相談してみよう。

「それで、スキルのことだけど？」

「はい。それなら大丈夫なのです。【反則呪術一覧】グリッチ||コトドインテックスと念じてみて」

急に饒舌になった少女が嬉しそうに言った。

念じると頭の中に少女と同じ声コトドが響く。

自呪術強化：

（火属性）【発火】：強化レベル1イグニッション

（水属性）（ありません）

』

「あのね。リイトは今、火と水属性の魔法の強化が出来るのです」

「今日の昼間に【発火】の魔法にしたやつ？」

「はい。一度初期化されたけど、経験を積めば『他呪術無効化』など、できることが増えるのです」

「他呪術無効化……か」

相手のスキルを、起動失敗させるものなのだろうか。

「あたしがリイトの力になるから。一緒にいさせて、ください」

一緒にいさせて、か。

そう言われると、断る理由なんて無いな。

「ああ。わかった。よろしくな」

「うん！」

僕がそつと頭を撫でてあげると、少女は目を細めにつこりとして僕に抱きついてきたのだった。

——  
僕と少女で、宿屋の部屋を借りた。

また孤児院に泊まるのは気が引けたし、お金を使うことでこの街——僕の育った街——に貢献したかった。

孤児院には明日顔を出そう。

——翌朝。

別々のベッドに寝たはずだけど、少女が布団に侵入していた。

ふわつと温かいのはこの子のせいかな。

この子はどうして僕なんかに？

いや、特に深い意味はないだろう。

一緒だと温かいとか寂しくないとか、そんな子供らしい理由だと思う。

僕は少女コドを起こし、二人で食事をとり孤児院に向かう。

孤児院は、精霊教の教会跡を利用している。

「あら、いらつしやい……ううん、おかえりリイト。昨日は宴に顔を出せると良かったんだけど。アリナを助けてくれたこと、お礼を言うわ」

「いやいや、忙しいだろうし大丈夫。お母さ——じゃなくてクリスタ」

孤児院の代表、クリスタ。

栗色の瞳と、長い髪が特徴の女性だ。

とても可愛らしくて王国の貴族から求婚もあるらしい。でも、この孤児院を守りたいと断り続けているようだ。

今でも声がかかり続けているらしい。

クレリッククレリックの神官職で、確か歳は二十五歳で僕のお母さんの存在だ。

もつとも、いつの頃からかお母さんって呼ぶの禁止、クリスタと呼べと言われているのだけだ。

孤児の僕を育ててくれたのはクリスタなので、やはりお母さんと思えない。



「大丈夫だなんて……しくしく、つれないなあ。せつかく帰ってきたんだからもっと甘えてもいいのよ?」

クリスタは泣きマネをしながらそう言っ、僕を抱き締める。  
柔らかい感触とふわっと花のような良い香りがした。

「ライト、王都に行つてからも毎月、寄付してくれてありがとう。本当に感謝しているわ」

集まってきた子供たちも「お兄ちゃんありがとう!」と口々に言う。

クリスタはさらにぎゅっと背中に回した腕に力を入れてきて、頬を寄せてきた。

彼女の髪の毛が、僕の鼻をくすぐる。

僕は慌ててクリスタを押しつけた。

「クリスタ、ちよ、ちよつと。子供たちも見てるんだし」

「どうして? 久々の親子の再会なんだし、抱き合うくらいいいじゃない? まあまあ、

赤くなつて」

「もう。お母さんて呼ぶなって言ったり親子って言ったり、都合良いんだから。子供扱  
いしないで……くださいよ」

この人の前だと、途端に自分が子供だと思ひ知らされる。

でも、帰ってきたと言う感じがして落ち着くのは気のせいだろうか。

興味津々に僕らのことを見る数人の子供たち。

僕がここを離れたときと顔ぶれは変わらない。

彼らの明るい顔を見ていると、ピンハネされながらも、報酬を送り続けて良かったと思  
った。

「で、その子が噂のライトとマエリスの子供ね。可愛いし、やっぱり似てるわね？」

「だからさあー！」

いや、年齢を考えれば……うん、この人分かって言ってるよな。

少女コドの周りにはいつの間にか孤児院の子たちが集まり、恐る恐る話しかけている。

僕は彼女を紹介した。

すると、なかなか快活そうな少年が、頬を染めて少女に話しかけようとしていた。

「あ、あの俺と友達になってくれませんか？」

「えつと……えと、ライト？」

少女は許可を求めるように僕の方を見た。  
もちろん自由にすればいいと、僕は頷く。

「じゃあ、お友達！」

「いいの？ やったー！」

「はい。ともだち——！」

コードは、男の子の手を取って握手をしていて……くるくる回り出した。  
男の子が、頬を赤く染めながら振り回されている様子は微笑ましい。

「目が、目が回るよお！ ぐるぐるぐる！」

この光景どこかで見たような……？

他の子も、その輪に入りたそうにしている。

「ねえ……ライト。せつかくならもつと可愛い名前がいいと思うんだけど？ お父さん」

「お、お父さんはやめてください。でも、考えておきます」

「そうね。期待してるし、いつか……ここで私と一緒に……」

「えっ？」

「ふふっ、ううん、なんでもない」

クリスタが笑うと、子供たち皆が笑う。

心安まるってこういうことなんだな。

## 第06話 雑魚魔術師と言われて

孤児院で、コードも含め子供たちが楽しく遊ぶ様子を眺める和やかな時間が過ぎていく。

そこにアリナがやってきた。

「おはようー！ リイトも来てたんだね。おはよー！」

「うん、おはよう」

「あれ？ その子……いつの間にかみんなと仲良くなってるんだ。こうしてみるとホントに親子みたいね」

はいはい、と僕はアリナの言葉を軽く流す。

「それで、リイト——それでね、あなたの力を見込んでお願いがあるんだけど」

「ん？ どうした？」

「実はね……あの……」

いつもはずけずけと話すアリナが言い淀んでいる。

「どうした？ 昨日の大<sup>ウォーグウルフ</sup>狼と何か関係あるのか？」

「うん。あいつら、ね……ディアトリアの廃墟の方からきてるんだ。王国軍の兵士も来てるみたい」

「ディアトリア——」

ディアトリアの廃墟。

元々、僕とマエリスはその村の出身だ。

しかし——十年前、村は破壊し尽くされ、今は廃墟になっている。

「できれば、魔物の発生する原因が分かればって思ってる。このままだと昨日みたいなことがまた起きそうだし」

アリナが僕の手を取った。

興味本位ではなく、街の意向としてどうするべきか、考えるためにということだった。

ここは辺境過ぎて冒険者の数も少ないという事情もあるようだ。

「おやおや、女連れで見せつけてくれるねえ。だが、お前のようなひ弱なヤツが首を突っ込む話じゃない」

数人の屈強な男たちが孤児院に入ってきた。

身なりは冒険者というより傭兵だろうか？

剣をぶら下げ軽装ながら革製の鎧のようなものを身につけている。

見るからに柄が悪いし、この街の住人でも無さそうだ。

「みんな、奥の部屋へ」

もしかして昨日アリナたちが言いかけていたのはコイツらのことだろうか。

アリナが立ち上がり、子供たちを逃がしている。

「そんなわけで、今日こそ相手をして貰うぜ。シスター」

「だから、私は忙しいので——キャッ」

傭兵の一人が、嫌らしい笑みを浮かべてクリスタの腕を掴む。

「お前らガキは街で大人しくしてればいいんだよ。大人は大人で楽しもうぜ」  
「クリスタから離れろ！」

僕はいてもたってもいられず、傭兵たちとクリスタの間に割って入った。  
強引に男の手を振りほどく。

「なあ、邪魔するなよ。俺たちとやるつもりか？」

「ライト、私は大丈夫よ。だからあなたも、奥の部屋にその子コドを連れて行って」

乱暴に掴まれたクリスタの手首に跡が付いている。

僕に笑顔を向けつつも、クリスタの足が震えているのが見て取れた。  
明らかに嫌そうな顔をしているクリスタを見過ごすなんてできない。

「コイツ……昨日、大ウオーグウルフ狼を十数頭まとめて倒したヤツじゃ無いですか？」

「何？ とんでもない大魔法を使ったっていうヤツか？」



傭兵達は、警戒し僕と距離を取った。

接近戦になるとこつちに勝ち目がなかったのでありがたい。

しかし。

「おいお前ら、相手が魔術師なら距離を取ったらダメだ。一気に迫り距離を詰める！」

リーダーらしき男が指示を出す。

「こんなガキが、大魔法など使えるわけないだろう？ コイツのこと知ってるぜ？ 勇者パーティーから追放された雑魚魔術師だ」

「そうか、あの生活魔法しか使えないってやつか」

どうしてそのことを傭兵たちが知っている？

警戒を解き、勝ったとばかりに剣を抜き僕に向ける傭兵たち。

傭兵たちは、すぐにクリスタの方を見て舌なめずりをする。

「まあ、お楽しみの前にちようどいいなあ。おい」

この隙に僕は呪文を唱えはじめる。

傭兵たちが馬鹿にした生活魔法がどんなものか、知ってもらうために。

「<sup>イクニ</sup>発……」

僕は唱えかけてやめた。

ここで<sup>イクニツシヨン</sup>「<sup>イクニ</sup>発 火」の反則強化を使い、大爆発なんか起こしたら……この孤児院が壊れて

燃えてしまう。

じゃあ……どうすれば——。

「ライト！ あたしも、頭にきたのです。水属性の魔法を！」

僕が後退し始めた時、コードの声が聞こえた。

水属性の魔法で僕が使えるのは、いつでもどこでもコップ数杯の飲み水を生み出す

<sup>クリエイトウォーター</sup>「水生成」だけ。

攻撃に使えるとは思えないけど、彼女を信じよう。  
意を決し、魔法を唱える。

「クリエイトウオーター水生成！」

今までと比べて反則呪術グリッチリコードの発動がやけに早い。

『水生成』の魔法解析……終了。反則強化グリッチを行いますか？』

## 第07話 水（汗）を飲んで VS 傭兵部隊

先頭の二人の傭兵が僕に向かってくる。

「なあ、魔術師。攻撃魔法は発動までタイムラグがある。この距離なら発動するまでにお前を切れるだろう」

「俺たちは冒険者で言えばB級クラスだ。まあ、ポンコツの放つ魔法なら余裕で耐えられるしな」

完全に舐め腐った傭兵が二人僕の元に近づいていた。

相変わらず口はニヤリと歪んでいる。

『クリエイトウォーター【水生成】の魔法解析……終了。グリッチ反則強化を行いますか？』

「YES！」

『強化を実行……成功しました。片手を腰に当てて標的を指さして下さい』

「標的？」

前回と比べて反則呪術グリッチリコードの起動が速い。

これなら最初の魔法に効果を付与できそうだ。

ただ、本来この魔法には標的の指定など無い。

頭に響く声に言われたとおり、片手を腰に当てる。

もう一方の腕を先頭の傭兵に向けると、すぐに僕の指先から水が出てきた。

すごい量の水が飛び出すとか、水の鋭い勢いで、敵を貫いたりするのだろうか。

場合によっては命まで奪ってしまうかもしれない。

いざというときは、水を敵から逃がそう。

僕はそんな期待を向けたのだけど、しかし――。

じよろじよろ……。

「えっ？」

「ククツ。なんだ？ そのシヨボい勢いの水は。やはりクス魔法使いか」

ワハハハハ、と傭兵達が僕を馬鹿にした声を上げる。

本来なら、【水生成】クリエイトウォーターはコップ数杯ほどの量しか生成できない。

しかし、今回は、コップ十杯くらいの水が指先から飛び出した。

飛び出した水を、アリナが上手にコップにキャッチして溜めている。

傭兵たちの言う通りだ。

倍に増えたくらいで、どうにかなるわけではない。

しかし、だ。生活魔法は連射がたやすい。

反則強化はこの程度なら、もつと連射をすればいい。

僕は奴らに指先を向ける。

その時――。

「ぐ……グハッ」

「ど、どうした？」

突然、先頭の傭兵が喉を抑え、膝を付いた。

両手で喉を押さえ、口から涎を垂らし苦しそうにしている。

ドン、と剣が床に落ちる重い音がした。

「ぐが——こ……コイツ——。気をつける……」

声も絶え絶えに、今にも死にそうに呻うめいている。

よく見ると、顔色が悪く、肌がしわしわになっている。

腕や足も、体つきも細くなっている。

急にやつれて見える。

隣の男も倒れ、首元を抑え倒れた。

「体内から水分を奪った?」

僕はなんとなく理解した。

生活魔法【水生成】は周囲の空気から水分だけを集める。

しかし《グリッチコード》の起動によって、指さした対象……傭兵の体から水を集めたのであれば。

急激に体内の水分を奪われ、具合が悪くなったのだろう。

もう一度体内の水を奪ったら、あの傭兵は命を落とすかもしれない。

「な……なんだこの魔法は——？　それに起動が速すぎんだろ——」

一瞬にて発動し、一瞬にて動けなくなるほどの効果。激しい苦しみを与える魔法に、傭兵たちはひるんだ。

僕は後方にいる傭兵の隊長らしき大男に指先を向けた。

「水クリエイトウォーター生成！！」

僕の指先から水が湧きだし、隊長とその周囲の傭兵達が苦しみだし膝を付く。相変わらずアリナは僕の指先から滴る水を上手にキャッチしている。

こんな状況なのに緊張感無いなあ。

「こ、コイツ——」

「もう一度この魔法を受ければカラカラになって死ぬ。向かってくるのなら、僕はこの人たちを守るためならなんだってやる」

「わ、分かった……だから、やめてくれ……お願いだ」



よほど苦しかったのか、僕が指先を向けると、隊長はあっさりと降伏したのだった。見た目は地味だけど、複数の対象に効果が出るようだし便利に使えそうな魔法だ。とはいえ、こんな男たちの体から奪った水を飲むのは微妙に気が引けるなあ。

「二度とこの人たちに手を出さないと誓えば助ける」

「わ、わかった。誓う。だから水を……」

クリスタに目配せをすると、怖い物知らずの子供達が、コップを持って傭兵達のもとへ走って行く。

水を溜めたコップを彼らに渡している。

「た、助かる——」

水を奪われた傭兵達は水を口に運び、次第に回復していく。

さすがに、もう僕に逆らう気力は無さそうだ。

「傭兵汁、おいしい?」

この孤児院の一番年少の女の子が、恐れも知らず傭兵のボスに話しかける。

僕は思わず笑いそうになり口を押さえる。

ようへいじる  
傭兵汁じゅうつて……。

「ああ、ありがとう。俺も国にこれくらいの子がいるんだけど……どうして俺はあんな乱暴なこと」

「そうだな。俺もだ。こんな子達の親代わりの人に——」

傭兵たちも十分に反省していることだし、さすがもう反抗してくることは無いだろう。

彼らは子供たちに囲まれ和気藹々とした雰囲気になった。

クリスタが恐る恐る近づくと、傭兵達は頭を下げた。

「済まない。今まで君を怖がらせて。もうしないから、許してくれ」

「はい。気持ちを変えて頂けたなら、私は嬉しいです」

クリスタは、次に僕を見つめた。

彼女が「ありがとう」と口を動かしたのが分かった。

僕は頷いて応える。

力があれば、大切な人々を守ることができる。

この《グリッチコード》があれば、少女コードがいればきつと、そこに到達できる。  
そんな気がしたのだった。

頭の中に、いつもの声が響く。

『敵を戦闘不能にしたことで経験を獲得しました！  
能力レベルアップ向上により新たな魔法が使えるようになります——』

## 第08話 閑話 勇者様は自分でしてください

## sideマエリス

私、マエリスには想像上の友達イマジナリーフレンドがいた。

恥ずかしくて、幼馴染みのリイトにも話したことがない。

その少女の姿は、勇者パーティでの戦闘時に頻繁に見られた。

戦いの場に佇んでいる。

五、六歳くらいの女の子。

人形サイズでは無く、等身大なので結構大きい。

とても可愛らしく、髪の毛の色はリイトにそっくりだ。

私だけに見える。

だから、想像上の友達イマジナリーフレンド。

どういうわけか、その少女がいるとスキルや魔法の発動がしやすいようだった。

私は、視野の端で少女が遊び回る様子を楽しむこともあった。

そんなある日のこと——。

「聖女マエリス、ここにいたか。実はな——」

私たちが所属するパーティのリーダーであるグスタフが、唐突に言った。

「リイトがいなくなった。多分、自分の實力不足を恥じてパーティを出ていったのだらう」

リイト。いつも一緒にいた、幼馴染みの優しい男の子。

ずっと一緒にいられると思っていたのは、油断だったのかもしれない。

ディアトリアのあの途轍とてつもない破壊の日だってそうだった。

見えない力が、私とリイトを間を引き裂こうとしている。

「でも、……挨拶もしてくれないのはおかしいと思います。いなくなるなんて反対です！ リイトと話をさせてください。彼を探してもよいでしょうか？」

「ダメだ」

しかし、私のささやかな願いをグスタフは却下した。

勇者パーティーに参加してから私は聖女候補だと浮かれていたのだ。

聖女になりさえすれば、しようもない大人の話など聞かずに、リイトとうまくやっていけると信じていた。

それなのに。

「まあ、リイトがいなくて寂しいかも知れないが、その時は俺に甘えてくれれば——」

グスタフが私の体をジロジロ見て言う。

背筋がゾクツとする。

去り際、グスタフの舌打ちが聞こえた。

「チツ。まあ、時間はたくさんあるさ……」

私たちのパーティーはリイトを欠いたメンバーで近くの小さな街に向かった。

途中、人ほどの大きさほどがある大<sup>ビージャイアント</sup>蜂に遭遇。

普段なら何ともないこの敵に、私たちは妙に手こずった。

グスタスのスキルの切れが悪い。

「クソツ。どうした？ 今日は何？ イチチチチ……！」

グスタスは、剣聖スキルの発動に失敗して、蜂の反撃を食らっていた。

起動失敗グセでもついているかもしれない。

怪我した責任を負えとも言うように、グスタフが私に、腫れた足を見せてきた。

「マエリス、怪我したので聖女の治癒の呪文を——ここに触れて……」

「勇者様は自分で治癒の呪文が使えますよね」

「うつつ」

シャキツとしないパーティの戦闘は、ようやく終わったのだった。

それから近くの街に戻り、一人部屋を取ってごろんと横に転がる。

すると、例の少女が私の顔をじっと見てくる。

何かを伝えてくれそうで、そうでもなくて。

じっと彼女を見ていると

「ライトに会いたい？」

って口を動かしたような気がした。

私は、うん！ と頷くと……急激に目の前が暗くなり、闇の底に落ちていく。

目を開けると、今までいたのと別の部屋にいた。

ふと自分の体を見ると、何も身に付けておらず素っ裸で、少し透けている。

え、っ。

幽体離脱？

さらに、なんと目の前のベッドの上には、なんとライトが眠っている！

今の私の状況を思うと、起きて欲しいような……欲しくないような。

やっぱり起きないでっ。

しばらく彼の寝顔を見る。



パーティで野宿をするときは、私はいつもリイトの隣にいた。

私の方がだいたい先に寝て、後から起きるので、こんなにぐっすり眠っているリイトを見るのは久しぶりだった。

じつとリイトの姿を見ていると、次第に落ち着いくる。

大胆になった私は、我慢できず恐る恐る彼に近づいた。

「リイト。話を聞いたわ。私はあなたがパーティからいなくなると聞いて反対しただけ、受け入れられなかった。でも、私はリイトが強くなることを知っている——」

謝罪と希望の言葉。

私はそれが当たり前のように、彼の額に唇で触れる——。

パリンツ！

リイトに触れた瞬間、私の頭の中に何か割れるような音と閃光が煌めいた。

そして、私の体からすつと抜けていくものがある。

感じたのだ。

イマジナリーフレンド  
想像上の友達を喪失してしまったことを。

。とてつもない喪失感を抱きながら、私の意識は暗闇の底に沈んでいったのだった――

## 第09話 女の子に鑑定魔法を使った結果……

「レベルアップで何か新しい魔法が頭の中に浮かんでくる——」

「ライト、おめでとう！」

「あ、ありがとう」

コード  
少女は嬉しそうに僕を祝福してくれる。

さっそく「呪文一覧」を頭の中に思い描いた。

グリッチIIコード  
反則呪術がサポートしてくれる。

イグニッション  
現在使用できる魔法は以下の通りです。

【発火】

クリエイトウォーター  
【水生】

パージ  
【浄化】

メッセージ  
【伝言】

メンディング  
【軽修理】

ライト  
【光】

クリエイトフード  
【食料生成】

↳

……うん。見事なまでに生活魔法ばかりだ。

グリッチIIコード  
だけど、反則呪術によつてとんでもない威力になるとしたら、いろいろできそうだ。

クリエイトフード  
「【食料生成】」だけど……もしこれを「水生成」のように人に使ったら……人から食料  
が……？」

僕はブルブルと頭を振り、ヤバい想像を頭から追い出した。

いくらなんでも、そんなグリッチは無いだろう。

たぶん。

以下の呪文を新しく使用できます

トウルーストライク  
【百発百中】（新規！）

ソーマタージ  
【小奇跡】（新規！）

アイデンティファイ  
【識別】（新規！）グリッチ可能

」

三つも覚えるとは。

これがグリッチⅡコードの力なのか？

それに、はじめて戦闘向けの呪文を覚えたな。

あと、小奇跡って小さな奇跡、幸運？

「うん。その魔法は、ちょっとした奇跡を起こせるよ！」

なるほど。……そのまんまか。

っていうか少女は魔法のことに詳しいんだな……。

奇跡というくらいだから、いざというときに使うといいのだろう。

そして。

アイデンティファイ  
【識別】。

この魔法はアイテムの鑑定などが行えるものだ。ふつうは鑑定士にお金を払って鑑定してもらう。

そういえば、マエリスとお揃いの指輪があった。

正直、これをいつ誰に貰ったのか僕もマエリスも覚えていないし、お金を払って調べるほどでもないと思っていた。

早速鑑定してみよう。

「【識別】！」

するとすぐにその結果が分かる。

鑑定結果

名前：マエリスとお揃いの指輪

材質：不明。

効果：一度失敗したことを、なかったことにできる。

残り使用回数：1回

』

なんと。

長年謎だった指輪の価値が分かってしまった。

これはスキルや魔法の失敗を一回、なかったことにできるものらしい。

そして、使い切りのアイテムだったとは。

まあ、お守り代わりにずっと持つておくのもいいだろう。

なんとなく楽しくなった僕は、アリナを手招きする。

何？ と近づいてくるアリナ。

「アリナ、何か鑑定してほしいものある？」

「急に言われても……鑑定つてアレでしょ？ 価値を見るつてやつ」

「うん」

「じゃあ、あたしを鑑定してみて？」

「え？ これは人には使えないはずだけど」

「そうなの？ ダメ元で！」

何が嬉しいのかよく分からないけど、アリナは僕の前でくるっと回った。どうせ失敗するだろうと思いい、手をかざす。

子供達や傭兵の人たちが、僕らを興味深そうにみつめていた。

「【識別】！」

人には使えないはずだが……しかし——。

『【識別】の解析を実行——成功しました。反則強化グリッチを行いますか？』

「は？ YES！」

しまった。ついクセでYESって言ってしまった。

『強化を実行。希望する追加の鑑定内容を思い浮かべてください』

「追加の………何だ？」



僕はアリナを見つめた。

そういえば、少し離れている間に、実に可愛らしく成長してるな。  
……などと考えたのが、よろしくなかった。

### 鑑定結果

名前：アリナⅡフェルスター

年齢：14

性別：女性

身長：155

体重：46

……』

僕の頭の中に、アリナの鑑定結果スベツクが読み上げられる。

「ちよ、ちよ……。これって……。？」

「え？ リイト？ 何か分かったの？」

「あ、う……うん」

「教えて！」

「えーつとね……」

言い淀む僕の気持ちなど知らず、頭の中にはアリナの私的プライベートな情報インフォが、無慈悲に流れ続けた。

以下、希望した追加情報になります。

バスト ウエスト ヒツツ  
B・W・H : 79 : 55 : 81

キスした経験回数 : 0

異性とお付き合いした回数 : 0

……

』

「ちよちよ、ストップストップ！」

『残念だけど鑑定を停止しました！』

慌てて中断した。

誰だ。

あんな鑑定内容を希望したのは――。

「なんかリイト、あたしを見る目が……」

「あ、ご、ごめん！」

しかしだ。

僕はあるなことを知りたいと願ったはずはないのだが……。たぶん。

「まあいいけど、それで何がわかった？」

「性別とか、年齢とか……体重とか」

「も……もう！ 他は良いけど体重は忘れて！」

なんとかその場を収め、追加で何を鑑定したのかバレずに済んだのだった――。

僕はその後正体を探ろうと、少女コドに鑑定魔法をかけたのだが、彼女にはどうやっても【識別】の魔法は通らなかつた。

第10話 百発百中の魔法 ～VS 巨鬼《オーガ・ジャイアント》～

傭兵の人たちとは和解。

元々悪い人たちでもなかった。

王国から雇われてこの地方に来ているようで、それなりに身分はしっかりしているの  
だろう。

何か悪い酒にも酔ったように気持ちが高ぶっていた。

彼らはそう話した。

「それで、さつきはあんな風に言ってしまったが、リイト——」  
「リイトさん、でしょ?」

アリナが胸を張って傭兵の隊長に文句を言う。

随分偉そうに言うんだな。

僕は別に呼び捨てで良いんだけど。

「リ、リイトさんに一緒にディアトリア廃墟まで行って貰えたらと」

「ディアトリア……どうしてでしょうか？」

「実は『勇者パーティの護衛』が我々が王国から受けた依頼なのです。ですが、あの<sup>ウオウケツウ</sup>大狼の集団などに攻撃され勇者パーティの集団とはぐれてしまったのです」

「勇者パーティ？」

「そうか、それで僕のことを知っていたのか。」

「はい……ですが、強力な魔法を簡単に行使できる魔術師のリイトさんに御一緒していただければ、我々も安心です！」

「は、はあ」

「僕が使ってるの生活魔法なんですよね……。」

「傭兵の我々がからお願ひするのもおかしな話ですが、必要であれば我々から報酬を用意しても構わないと思います」

「報酬ですか」

今までそんなこと言われたことないからくすぐったい。

彼らの話だと、廃墟に近づくほど、ウオーグウルフや大鬼など魔物オーガが多く出るらしい。彼らは引き返してきたのだという。

彼らより強いとは言え、護衛無しで勇者パーティが向かったのなら、ちよつと心配だ。マエリスもいることだし僕も向かうことにしよう。

「じゃあ、どうしようか……危ないし孤児院に——」

コールド少女を見ると、彼女は僕の手をぎゅつと握った。

「ライトと一緒に行く。それに……マエ——」

「それに？」

「ううん、なんでもない。絶対一緒に行く！」

結局、彼女を連れて行くことになった。

確かに、魔法のことや反則呪術グリッチ||コードのことに詳しい少女がいれば心強いし、どうも彼女は戦闘時の身の置き方に心得があるのか、危なげも無くついてきている。

傭兵の人たちはざわついたけど、一緒に行くことには納得してくれた。

「じゃあ、嬢ちゃん、俺が肩車でも——」

「いや—————」

「隊長、顔が怖いから……」

本気で怖がっていないものの、少女コードは俺にくっついて離れなかった。

傭兵の人たちがどつと笑う。

さあ、日の高いうちに出発だ。

順調にいけば日暮れまでに廃墟にたどり着けるだろう。

僕たちは、アリナやクリスタ、子供達、街の人たちに見送られながら、ディアトリアの廃墟に向けて出発した。



「リイトさんの魔法ヤバくないですか？」

「つてか、もうリイトさんだけでいいんじゃないかな？」

僕が襲ってきたウオーグウルフやオーガの集団を【イグニッション発火】で仕留めると傭兵さん達にそんなことを言われた。

「いやいや、敵に接近されると僕は無力ですし」

「屋外だと近づく前に消し炭ですよ。近づいてもあの水魔法で倒せるでしょう？ つて  
いうか喧嘩を売っちゃいけない相手だったんですね。ゾっとします」

微妙に僕を怖がってすらいるような気がするけど、きつと気のせいだろう。

一方、少女コイドはずっと上機嫌だ。

危なげも無く僕たちは進んでいく。

「出ました。コイツが倒せずに撤退するしかなかったのです。倒せそうにないなら、最悪足止めだけして、足もとを駆け抜けましょう」

傭兵の隊長が叫ぶ。

現れたのは巨オーガ・ジャイアント鬼。

ここまでに見たウオーグウルフやオーガを使役していたのだろう。

オーガはおよそ人の二倍くらいの背丈だけど、コイツは四倍くらいある。

「リイトさん、お願いします」

なんか使われている気がしないでもないけど、悪い気はしない。

乗せられてしまう性格はどうにかしないとな。

僕は今まで通り、「発火」の魔法を使う。

しかし。

バチバチバチ……ゴオオオオオオオオオオ——キイイイン。

「な、なんと」

オーガ・ジャイアントは、妙なテカリのある防具で炎の攻撃を弾いた。

何度【発火】を打っても弾かれてしまう。

ずしん、と音を立て、接近するオーガ・ジャイアント。

その巨体の動きはやや緩やかだ。

「ちよつと試したいことがあります。レンジャー野伏の方は矢を射つて貰えると」

「は、はい」

傭兵のレンジャーが矢を射る準備を始めた。

僕は、彼女に試してみたい魔法を使ってみる。

トウルーストライク  
「百発百中」！

『【百発百中】の魔法を解析します——成功しました。反則強化グリッチを行いますか？』

えっ。

普通に使うだけのつもりだったのに。

ここに来るまでに経験を積んだからか？

もちろん、YESだ！

「YES！」

『強化を実行。対象に触れてください』

僕はレンジャーの肩に触れる。

すると彼女の瞳が虹色に妖しく変化した。

すぐにレンジャーはオーガ・ジャイアントめがけて矢を射る。

すると、キィィィィと空気を切り裂く音を立て、矢が飛んでいった。

「グアアアアア！」

矢は見事に、オーガ・ジャイアントの顔に突き刺さる。

ヤツは兜を装備しているので、狙える範囲は狭いのだが。

それにしても痛そうだ。

でも、見た目ほどのダメージは受けていなさそう。

「リイトさん、やりました！」

「では、次はこの矢を使って目の近くを！」

「はいー！」

再び矢が射られ、光を放つそれはオーガ・ジャイアントの目の近くに命中した。

よろける巨体。

【光】の魔法がやじり部分にかけられており、輝く光の球により視力を奪ったのだ。もうこちら側を認識できないようだ。

【光】の魔法は、およそ十分ほど効果がある。

矢を引き抜かれるか、魔法の効果が切れるまでが勝負だ。

「駆け抜けろ！」

「うおおおおお！」

僕らはオーガ・ジャイアントの足もとを抜け、廃墟に向けて走った。

すれ違いざまに【鑑アイデンティファイ定】を使ってみる。

『反則強化を実行。希望する鑑定内容を思い浮かべてください』  
「弱点！」

### 鑑定結果

名前：オーガ・ジャイアント

脅威度：A級

特殊能力：回復

以下、追加情報

弱点：前方は重装のため強固だが、後方の装甲は軽微。攻撃するなら後方からがオススメ。

』

オススメが出た。

「背中側の装甲は？」

「ん？ リイトさん！ 背中側は防具も無くから空きだ！」

材料が足りなかったのか？

確かに背を見せなければ、裏側はがら空きでよかったのだ。  
むき出しの背中が哀愁を誘う。

「みんな、飛び道具で攻撃を！ 背中と、足を狙って！」

当然のように「百発百中」を使い、全て命中させていく。

「す、すごい……聞いたことが無い魔法だけど……リイトさん！」

「お、俺も俺も！ す、すごいぞ！」

傭兵の人たちが次々と投げ武器を放つ。

本来投げる武器でない大剣を投げる人もいるぞ……。

放った全ての攻撃が命中した。

そうか。この魔法は本来は命中率を上げるだけだが、反則強化<sup>ブリッチ</sup>で文字通り百発百中になるワケか。

僕は言葉を失ったのだが、オーガ・ジャイアントは倒れない。

ただ、ヤツは傭兵さんたちの攻撃により、ついに動きを止めた。  
動き始める前に。

「リイトさん、お願いします！」

「イグニッション発火！」

ゴオオオオオ！

反則強化を背中に向け連打し……オーガ・ジャイアントを燃やし尽くした。

「すごいな、【百発百中】。さすが攻撃支援魔法、いつかは攻撃魔法を覚えて……！」

「ううん……リイト。あのね、それはね……針穴に糸を通したりする、生活魔法なの」

「えっ……」

「……」

「……」

傭兵の人たちが僕たちの元に集まってくる。



「うおおおお！」

「マジか！」

「全然倒せなかったのに……倒せた！」

皆が喜んでいる。

緊張の糸が一気に緩んだのか、膝を付くひともいる。

「皆さん、動きを止めて頂き、ありがとうございます」

「リイトさんの魔法なら、要らぬ手助けだったかもしれないな」

「いえ、確実に仕留めるために必要でしたから」

「リイトさん、謙遜を。一緒に戦えたことに誇りに思う。それに、これほどの戦いは記録に残すべきだな」

彼らのテンションの高さに驚く。

僕は、次々に握手を求められたのだった。

## 第二章 幼馴染みの聖女

### 第11話 幼馴染みと一緒に、夜を過ごす…… (1)

日が暮れた。

ここは山岳地帯の中の荒野のただ中だ。

ディアトリアの廃墟までもう少し、というところで野営をすることになった。

周囲には僕らを襲ってくるような魔物の気配はない。

ディアトリアの廃墟から現れたという魔物は、おおかた倒してしまったようだ。

僕と少女は、今の能力を確認しておくことにする。

「グリッチIIコード反則呪術一覧！」

自呪術強化：

(火属性) イクニツシヨウ【クリエイトウオーター炎】：強化レベル1

(水属性) クリエイトウオーター【水生】：強化レベル1

【無属性】アイデンティファイ  
【鑑定】：強化レベル1  
【百発百中】トゥルーストライク：強化レベル1

なるほどなるほど。いつの間にか無属性魔法も強化できるようになったようだ。  
魔法一覧は……。

現在使用できる魔法は以下の通りです。

イグニッション  
【発火】グリッチ（強化可能）

クリエイトウォーター  
【水生】グリッチ（強化可能）

パージ  
【清浄化】

メッセージ  
【伝言】

メンディング  
【軽修理】

ライト  
【光】

クリエイトフード  
【食料生成】

トゥルーストライク  
【百発百中】グリッチ（強化可能）

【ソーマタージ  
小奇跡】

アイデンティファイ

グリッチ

【識別】(強化可能)

『

ん。そういえば川も近くに無いし……汗を流したい。

清浄化の魔法を使い、僕や少女コトを清める。

これは、体を清拭して綺麗にしたり、汚い場所の汚れを消し去る便利な生活魔法だ。しゅわわわわわっ。

体が泡のようなものに包まれる。

といっても、魔法的な泡で体が濡れたりするわけじゃない。

花の良い香りがして、近くにいた傭兵の人たちとともに、体がさっぱりとしていくのを感じる。

「ねえ、ライトさん、さっきの魔法をもう一度私に使ってもらえないかしら？」

この魔法は女性に受けが良い。

レンジャーの女性が僕に話しかけてきたので使ってあげる。

泡に包まれる彼女は、なんだかうっとりしている。

「ああ……この魔法素敵ね。肌がぷるんとして……ありがとう。ライトさん、また街に戻ったら個人的にお礼を……」

「あ、はは、気にしなくて大丈夫です」

随分気に入られてしまった。

でも、そのたびに少女の笑顔に陰りが見えるような気がした。

もつとも、彼女は笑顔を崩そうとしないのだけど。

食事をとり、見張りを立てて寝る段階になって、傭兵の人たちが声を上げた。

グスタフの姿が見える。

どうやら、勇者パーティにこの部隊が発見され合流したようだ。

はあ、と僕は溜息をつく。

面倒くさい。

グスタッフは幸い、少し離れたところにいた僕には気付かなかったようで、姿が見えなくなつた。

勇者パーティでの僕への扱いを傭兵の隊長は知っていたので、上手く取り計らつてくれたようだ。

ありがとう。

だけど、今後一緒に行動するのも気が引ける。

合流できたのなら、傭兵部隊は僕と一緒に行動する必要が無い。

明日からは別行動をしようか、などと考えていると……。

僕が少女と二人で寝ようとしていた簡易テントに、傭兵の隊長がやってきた。

「リイトさん、そういうことだったんですね。隅に置けませんな」

「ん？ 何のこと？」

「こんな可愛らしい……っっていうか聖女候補の女の子が恋人だなんて」

「こ、恋人？」

彼の後ろから、誰かが現れる。

「ライト？」

ふと、聞き覚えのある声にはっとすると……そこには。

「マエリス！」

「ライト！ こんな所で会えるなんて……！」

言うのと同時に、僕に抱きついてくるマエリス。

ぎゅっと強く強く抱き締めてくる。

ふわっとした柔らかさが僕を包む。

僕らの様子を見た隊長は、音も無くテントを立ち去った。

なんか誤解しているみたいだけど、まあいいか……。

「ライト……ライト……！」

「お、おい、どうしたんだ？」

「もう……どうしたんだじゃないよ？ 急にいなくなつて……ライトのバカ！」

「あ、ああ。ごめんな。なんて聞いている？」

話を聞くと、やはり僕が自分勝手に抜け出したことになっていた。

僕は訂正をしつつも、細部は誤魔化しておく。

ただ、グスタフには気をつけろと、それだけを伝えた。

「ふふつ。ありがとう。大丈夫、あんな奴にどうにかなったりしないよ？ 私、聖女に認

められたらあんなパーティやめるんだから！」

「そ、そうか。その勇者パーティはどうなってるんだ？」

「うん。最近新しい魔術師の女の人が入って——それで今は私の聖女の儀式をするためにディアトリアの廃墟に向かっているの」

「廃墟に？」

「うん。リイト、聖女の儀式って知ってる？ それを行う場所が廃墟にあるんだって。私、知らなかった」

僕も初耳だ。

僕とマエリスが生まれたディアトリア村。今では廃墟になっている

子供だから、そういうことを知らなかっただけなのだろうけど。



まさか、自分の生まれた村にそんな場所があつたなんて。

「今はこつそり、カトレエヌと一緒にテントから抜けてきてて……朝には帰らないとね。リイトはさすがにパーティには戻らないよね」

「うん。ちよつと……な」

「だよな。私もそんなに長く続けるつもり無いし、この儀式が終わったら正式に聖女に認められるから……そしたら、二人でパーティ組もう？」

「ああ、いいよ。でも三人かな」

「えっ？ だ、誰？」

急激に顔が険しくなり、頬を膨らませるマエリス。

「実は、この子と一緒に行動してて」

僕は、既に眠っている少女コルドをマエリスに見せた。

「えっ。この子……リイトの子供？」

「だーかーらー！ 歳を考えろって！」

いつものお約束の展開。

もう慣れっこだ。

まさか僕をずっと前から知っているマエリスに言われるとは思わなかったけど。

「そっか、そうだよね。ライトと同じ髪の毛の色……だ……か……らう？」

「ん？ どうした？」

マエリスは、少女の顔を見ると、目を見開き、あんどりと開いた口を手で押さえた。

「この子……知ってる。イメージナリーフレンド想像上の友達……」

第12話 幼馴染みと一緒に、夜を過ごす…… (2)

「イマジ——？」

「あつ、ええと。その、私だけに見えてた女の子とそっくりでっつ。というか……そっか、この子なら、いいよ？ 私は」

マエリスは真つ赤な顔をしている。

少女と、《グリッチコード》の話を伝えると、マエリスは急にニコニコとし始めた。表情がころころ変わってかわい……おもしろい。

「むにゃ……リイト……誰？」

騒がしくしたからだろう。

少女が目を覚ました。

目をこすって、マエリスをぼんやりと見つめている。

「この子、名前がコード？ うーん、もっと可愛い名前にしない？ 例えば——チコ」

「チコ？ かわいいか？」

「いいの！ ほら、グリッチ：コードと関係あるのなら丁度良いでしょ！」

「そうか？ まあ、この子が良ければ」

少女。<sup>コード</sup>いや、チコは、ガバツと起きマエリスに抱きついた。

マエリスは、寝ぼけまなこのチコに、耳元で話しかける。

「あなたの名前は、これからチコよ。私はマエリス。よろしくね！ お母さんがもし見

つからないなら、私が——」

「わたしは……チコ……！」

その瞬間、チコの体からカツと閃光が放たれた。

まばゆい光で僕は視界を失う。

光の洪水に襲われる中、マエリスが僕に抱きついてくる。

今度は、ふにっと柔らかいものが僕の手に触れる。

マエリスって胸がある……などと当たり前のことをこんな時なのに思う。  
いや、むしろグイグイ押しつけてきているような気がする？

「リイト……マエリス……私の名を呼んでくれて……ありがとう」

チコの声が、妙に大人っぽい感じになって聞こえた。

まるで、頭の中に響く《グリッチコード》の声を、大人にして艶っぽくしたような  
声。

光が次第に弱くなっていく。

「すやあ……リイトう……マエリスう……チコお」

急に幼い声に戻って、チコは寝てしまった。

完全に光が消え、ランタンが灯す光だけになり静かになる。

「今のは何だったのかしら……？」

僕とマエリスはすうすうというチコの寝息を聞きながら、しばらく抱き合っていた――

マエリスとごろんと毛布に横になって話をする。

チコは僕と腕を組んで寝ている。

一方のマエリスは、チコの反対側で僕の方を向いて抱きついてきている。

彼女の体の柔らかさが伝わって、心地が良い……けど今日は妙にくっついてくるな。こういうのを「甘えてくる」と言うのだろうか？

「マエリス、妙にくっついてきてない？ チコがいるの忘れないでね」

「いいじゃない。ずっと離れてたんだし」

「離れてたって、一週間やそこらだろ？」

ぐいぐいと色々押しつけてくるマエリスと、とりとめのない話をする。

僕たちはくっついたまま眠った。

早朝。

チコはまだ眠っていて、僕とマエリスだけが先に起きた。

「じゃあ、私は帰るね。儀式が終わって聖女になれたら、絶対三人でパーティーを組もう。約束ね？」

「わかった。俺は廃墟でちよつと調べ物したら、孤児院にいるから」  
「うん。待っててね」

餞別とばかりに、僕に抱きつくマエリス。  
僕はそつと、彼女の背中に両手を回す。

「じゃあ、夜話してた鑑定魔法を——」  
「うん聖女になれるかどうか。お願いね」

夜に、鑑定魔法のことを話したら、強く食いついて、起きたら使ってあげることになつていたので。

「じゃあ行くよ。  
アイデンティファイ  
 【鑑定】！  
グリッチコード  
 改造呪術！」

### 鑑定結果

名前：マエリス

年齢：16

性別：女性

身長：158

体重：47

職階級：クラス聖女

LV：20

所持品：ライトとお揃いの指輪、ホーリーアミュレット聖なる守り、聖女着

### 追加事項

B・W・H： 83・57・85

備考：チコのお母さん

好きな人：リイ——



「ななななな。ストップ！」

『えー。ちえっ』

「なにになに？ どうしたの？」

「マエリス!! チコのお母さんって出たぞ。相手は誰だッ!？」

僕は思わずマエリスの両肩を掴んだ。

「えっ。私、まだ赤ちゃん産んでないよ……？ それに、まだそういう事、経験ないよ

……？」

頬を真っ赤に染めて恥ずかしがるマエリス。

ふと何かに気付く。

「それに、歳を考えてよお！ だいたいそんな相手いなかったでしょう？ それにもし

そうなら……私の旦那さんは……ぶつぶつ……」

「おっ。おう。そうだな」

僕も人のことを言えないなあ。

まあ、チコの願望的な何かだろう。

「ふふっ。でも私のことで興奮してくれて……ふふっ」

「いや、その、気になってさ……あと、マエリスは聖女になれるよ。大丈夫」

「よかった！　じゃあそろそろ、私は行くね」

「また、孤児院で会おうな」

「うん！」

マエリスは、手を振ってテントを去って行った。

そういえば、職階級クラスが既に聖女になっていた。

だとしたら、儀式というのは形式的なモノなのかもしれない。

すぐにチコが目覚めます。

「……おはよう？　ライト。マエリスは？」

「おはよう、チコ。マエリスはちよつと用事があるつて出かけたよ」

「えー？」

「大丈夫、すぐに戻ってくるから」

そのためにも、廃墟の調査をとつとと終わらせて孤児院に戻らないとな。

僕は決意を新たにしてテントを出る。

ちようど、そこには傭兵の隊長がいた。

「ライトさん、おはようございます。昨日は、あんな可愛い子とお楽しみで——」

「おはようございます。いやいや、そういうのないから！」

全然信じていないようだ……。

でも、楽しい夜を過ごせたのは確かだ。

「ライトお。ニヤけてる！」

僕はどうやっても頬が緩むのを、チコに笑われるのだった。

## 第13話　　そういう関係では

「やっぱり、行ってしまわれるのですね」

「はい。グスタフに会うと、面倒なことになると思うので。もう勘づいているのかもしれませんが」

僕とチコは出発の準備をして、キャンプ地の端まで来た。

傭兵の隊長が、キャンプ地を離れる僕らを見送りに来てくれた。

「そうですか。今思えば、正直、あのグスタフさん……勇者候補はあまり……おっと、失礼しました。今さらですな」

「いえ、大丈夫ですよ」

「世話になりましたし、あの聖女候補の彼女さんを気にかけておきます」

「いや、だからそういう関係では——」

「いえいえ、何も言わなくてもわかってますって」

僕は説得をあきらめた。

グスタフにバレるといふことで、隊員さんたちの見送りは無しにしてもらった。

少し寂しいけど、また会えるだろう。

さつそく、ディアトリアの廃墟で会えるかもしれない。

僕は隊長としつかりと握手を交わす。

チコも続いて「わたしも！」と元気に言つて、握手をしていた。

「じゃあ、チコ。行こうか？」

「うん！」

「嬢ちゃん、少し大きくなつてないか？ いや、気のせいか……？」

「そうですね、たった一晩で」

「確かに。では、気をつけて！」

「はい。隊長さんも、皆さんも気をつけて」

勇者パーティは、傭兵部隊と王国軍の兵士を連れていようだ。

兵士の部隊は、勇者パーティから離れなかつたのだろう。

まだ日が高く昇る前。

ディアトリアの廃墟に到着。

勇者パーティーの部隊は大所帯になる分、僕らの方が足が速い。  
チコは大人の足にでも十分着いてくる。

「ライト、すぐ近くだったんだね」

「そうだな。周囲は荒地地、か」

僕は六歳の頃までここにいた。

村全体を焼き尽くす大爆発が起きた、あの時まで……。

ここにいた時の記憶はかなり曖昧になってきている。

父さんや母さんの記憶も薄れている。

「景色が記憶と微妙に違うような気がするなあ」

「リイト、そうなの？」

「うん。建物が崩れていつてるからかな」

廃墟はこうやって、どんどん朽ちていくものかもしれない。

僕は二人で手をつなぎ、廃墟になった村の中に足を踏み入れていく。  
魔物の気配は感じない。

ウオーグウルフ  
大 狼やオーガが巣を作っていると思っただけ、そうではなさそう。

「リイトお、あそこ、人がいる！」

「ほんとだ。あの後ろ姿、どこかで見たような気がするな？」

「チコも！」

チコが見ているのなら、街中か、さっきのキャンプ地か？

一人だけ偉そうな人物が、数人の護衛を連れている。

それなりの身分なのだろう。

変だな？

勇者パーティの部隊とは別行動をしている？

このまま帰るつもりだったけど、そういうわけにはいかなかった。  
僕らは、彼らの後ろをこっそりと着いていく。

「見つかったら、チコを担いで逃げるからな」

「大丈夫、走れるよー！」

今朝傭兵の隊長が言っていたように、少し大人びた表情を見せるチコ。  
頼もしい。

「聖女候補がじきに、ここに儀式を行いに来る。召喚の準備は出来ているか？」  
「いえ、もう少しかかります」  
「何をしている。急げ！ 僕も行く」

彼らに接近すると、崩れた建物の前で、そんな話をしていた。



明らかに怪しい。怪しすぎる。

見覚えのある人物というのは、近づいて誰か分かった。

「あれは、王国騎士の一人で、名はボリスだったかな」

「うん！」

勇者パーティの管理をしている男。

チコは見たことないはずだけど、まあいい。

彼らは建物の中に入っていった。

僕らも後に続こうと建物に近づく。

が、彼らが侵入者対策をしていないはずもなく……。

「リイトお。くさいよお」

「くつ。こいつらは……スケルトン骸骨にグール屍食鬼、アンデッド不死者か！」

十体以上のアンデッドが現れた！

獲物を見つけたスケルトンはカラカラと骨を鳴らし、とびきりのご馳走を前にグール

が「グウウウウウルウ」と、うなっている。  
とはいえ、ここは屋外だ。

「リイトお。燃やそ？」

「そうだな。『発火』！」

『反則強化！』

炎に包まれ叫び声一つあげず、灰になっていくアンデッドたち。

これで僕たちの存在がボリスにバレたかもしれない。

そして、奴らが良からぬ事をしているのがこれで確定した。

アンデッドの使役。

この世界では、冒険的な事だと言われている。

これからの戦いに備えて、自分の能力を確認する。

「反則呪術一覽！」

自呪術強化：

(火属性) イグニッション【発火】：強化レベル1

(水属性) クリエイトウォーター【水生】：強化レベル1

(水属性) パージ【浄化】：強化レベル1 (新規！)

(無属性) アインテンティファイ【鑑定】：強化レベル1

(無属性) トルルーストライク【百発百中】：強化レベル1

他 解析中

他呪術複写：

解析中

』

【浄化】がグリッチでできるようになっている。

それに……。他呪術複写？

今は解析中となつてはいるけど、いずれ使えるようになるのかもしれない。

「ボリスは聖女がどうか言っていた。マエリスのことだろう。どう見ても、良いことが起きると思えない」

「うん、チコもそう思う」

まっすぐな瞳で、チコは僕を見つめた。

でもこの子を、これ以上危険な目に合わせても良いのだろうか？

建物に入れば、逃げ場がなくなるかもしれない。

かといって、ここで待たせておくのも……。

「今見て見ぬ振りをすると、絶対後悔する——でも、どう考えても、危険だと思う」  
「リイト。行こう！ マエリスが危ないんでしょ？ わたしは大丈夫！」

不安にさせないようにと思っただろうか？

信頼していると、伝えるためだろうか？

チコは、とびきりの笑顔を僕に向けて言った。

いつも見る、可愛らしい姿だ。

僕と同じ色の髪の毛が、美しくなびいている。

「チコ……君は」

今までも危険なことがあったけど、チコはいつも笑顔で僕の側にいてくれた。今だってそうだ。

僕の手を、その小さな手できゅつと握ってくれている。目頭が熱くなる。

「ライト、泣いているの？　大丈夫？」

「いや、チコの気持ち嬉しくって。ありがとう」

「そっか。じゃあライトが元気になるのなら……！」

チコは、また笑顔を僕に見せてくれた。

ああ、この子は――。

何があっても、僕はチコを、そしてマエリスを守る。

僕は、そう決心して扉を開けた。

第14話 そのザマは何よ？(1) — sideマエリス

「マエリス？ どうしたの？」

「う……うう」

「マエリス！」

目を開けると、私を心配そうに揺すっているカトレーヌさんがいた。

ここはある小さな街の宿屋。

カトレーヌさんは勇者パーティに参加している女性の一人だ。

私より四つ歳上で二十歳になる。

ショートカットがよく似合う可愛い人だけど、音もなく忍び寄って敵を倒す手際は怖いとすら思う。

「カトレーヌさん……ありがとう」

私は、夢を見ていた。

ああ、そうか……もう想像上イマジナリーフレンドの友達も……リイトも……いないんだ。

私は涙を拭いた。

落ち着くまで、カトレーヌさんは私をぎゅつと抱き締めていてくれた。

「ふう、落ち着いたみたいね。そんなにリイト君がいなくなったのが寂しかった?」

「うん……。急にいなくなつたし」

「やつぱりか。でも、挨拶もせずになくなるなんて、ちよつとおかしいわよね。アタシは……多分あのグスタフが追い出したんだと思つてる」

「やつぱり、そう思いますよね? でも、追い出すなんて」

「アイツならやりかねない。だいたいさ、アイツの目イヤらしいと思わない? 私や

……マエリスのこともじつと見つめてるときがあつてぞつとした」

あの、時々感じるいやな視線は、私の勘違いじゃなかつたんだ。

「それに比べてリイト君は真面目だったよね。マエリスの幼馴染みなんですよ?」

「はい。ずっと一緒にいたので、こうやって離れてしまうのが信じられなくて」

「だよね。ライト君の【清浄化】の魔法、すっごく気持ちよかったのになあ——ん？」  
「気持ち……よかったですか？」

「う、うん。なに？ 怖い顔して？」

怖い顔……そういえば眉をひそめてしまっていたような？

「えっ？ ご、ごめんなさい」

「ふっ。気持ちいいって言っても、魔法の事よ？ あれ気持ちよくない？」

そういつて、カトレーヌさんはうっとりとした顔をした。

思い出しているのだろう。

こんな綺麗でプロポーションもいい人がそんな表情をしていると、私もどきどきしてしまう。

大人って感じがして頼りになって……綺麗で胸も大きくて……くっ。

「やっぱりグスタフの奴、ライト君を追い出したんだと思う」

「……むう。だとしたら、許せないです」

「うん。まさか、傷付けたり命を奪ったりは……アイツならやりそうだわ」



私はさつき、リイトが眠っているところを見ている。

無事なのは知っている。

それは嘘や幻ではない。

——と思う。

「多分、大丈夫だと思えます」

「ふふ、マエリスが言うならきつとそうよね。王都に帰ったら、姫殿下に真っ先に伝えて、リイト君を連れ戻すようお願いしよう?」

「え? 姫殿下ですか……? 力になって下さるのですか?」

カトレージュさんは、口を開いて、えっ? という表情をした。

「はあ……グスタフは教えてなかったのか。そりゃ、リイト君もちよつとグスタフが強く言えば、出ていくはずだわ」

「どういうことですか?」

「あなたたちを辺境の街の孤児院でスカウトしたのは、姫殿下なのよ。マエリス、あなた

とリイト君は間違い無く二人とも、重要人物として王都に招かれた」

「そうだったのですか？ 姫殿下にはお目にかかったこともなくて、グスタフさんからも何も聞いていなくて。あの人は私は聖女で、リイトをお荷物だと言っていて」

王都に来てから、王家からの話は全てグスタフさんを通して聞いていた。

大切なことを、彼は教えてくれていなかったのだ。

「本当にお荷物なら、どうして勇者パーティに入れたりしたのか。魔術師なんて他にもいるのに、彼でなければならぬ理由は？ まあ、それはアタシも知らないんだけど」

「そうだったんだ。やつぱり……そうだよね！ リイトは、必要とされている。ううん、きつと、私よりもずっと、必要な存在なんだ」

リイトがここにいないのが悔やまれる。

あの時、グスタフさんにリイトが連れて行かれるとき、無理矢理にでもついていけばよかった。

## 第15話 そのザマは何よ?(2) — sideマエ

リス

「あなたは聖女になれるんだから、重要なのは変わらないと思うけど……でもリイト君よ。なぜ、重要だと考えているのか……そこまでは私は調べられなかったの」

リイトは、姫殿下に何らかの力を認められていた……!

実はこの辺りの事情は、本来はカトレヌさん自身も知らなかったけど、気になって彼女なりに調べたことらしい。

「そこですよね」

「アタシはぎりぎりパーティに置いて貰っている身でもあるから、グスタフに逆らえなくて。でも本当はもつとかばってあげたかった。マエリス、今さら、許してくれなくてもいい。でもね、アタシは……マエリスがリイト君かばってるのを見る度に、悔しい思いをしていたの」

カトレーヌさんの立場は当然あって、仕方ないと思う。

「うん。みんな事情あるから、私は気にしていません。そう思ってくれてただけで嬉し  
いです」

「ああ……。マエリス」

リイトは必ず、強くなるという確信が私の中にあつた。

それを、他の人も……姫殿下も認めて下さっていたなんて。

私の独りよがりじゃなかった。

「マエリス、元気が出てきたね」

「はい……！」

「で、リイト君のことだけど、もし彼を好きな人がいたとしたら、どうする？」

「えっ？ リイトを好きな人……？」

「リイト君のことになると、顔色が変わるわね。うーん、マエリスとリイト君の愛情の強  
さを考えると、割って入るのは難しいそうねえ」

カトレーヌさんは、やれやれ、という感じで手を振った。

「私たちはそういう関係じゃないですよ。幼馴染みです。でも家族みたいに大切には思っていますけど」

「そうかしら? でももし、私がリイト君を好きになったら……ちゃんとマエリスに言うね」

「は、はあ……えっ好きに?」

「うん。歳下君に甘えて貰うのって嫌いじゃないし」

……冗談だよね?

私とカトレーヌさんは、この仕事が終わったら、リイトを見つけて……誘って、みんなで美味しいものでも食べに行けたらいいねなどと話したのだった。

私たちは、王国辺境に向かうことになった。

どうやら、私の働きが認められ、聖女になる日が近いそうだ。

私は知らなかったのだけど、聖女の儀式を行うことで正式な聖女になれるそうだ。

私やリイトが生まれた村があつた場所——ディアトリアの廃墟に、聖女の儀式を行う祭壇があるらしい。

勇者パーティーと傭兵部隊と、王国軍兵士たちで、そこに向かう。

その途中で、勇者パーティーに新しいメンバーが加入した。

魔術師のマルガという、少し謎めいた少女だ。

彼女はひたすら無口で、無愛想だった。

攻撃魔法を得意とするようだ。

あともう少しで廃墟というところで、私たちは魔物との戦闘に大苦戦する。

魔物との遭遇は何回かあつたけど、その日は大物……突如、オーガ・ジャイアント 巨 鬼に遭遇してし

まった。

それでも、普段ならグスタフ一人で倒してしまふのだが、彼の剣のキレが悪い。

うまくスキルが発動せず、戦闘は大混乱になった。

そして、しまいには私たちを護衛していた傭兵部隊とも離れてしまった。

新入りの魔術師は魔法を行使するものの、決定打に欠ける。

どうにもならず、カトレーヌさんが時間を稼ぎ撤退を開始。

戦闘がはじまって一番最初に逃げはじめたのはグスタフさんだ。

「グスタフ、あなた、そのそのザマは何よ? 今日は一回も剣聖スキルの発動が成功しなかったじゃない!」

「そ、それは……」

「ライト君がいなくなつて、もうこのパーティはボロボロじゃない? あなたが勝手なことをしているって、姫殿下が知つたらどうなるかしら……?」

「な、なぜそれを……まあ、それは、なんとかなる……はずだが……」

さすがに、今日のダメダメさに愛想を尽かしたカトレーヌさんが我慢できなくなつたようだ。

その初めて見る勢いに押されている。

なんだ、遠慮している相手にしか強く出られないのか。

「お荷物は、ライト君じゃなくて、グスタフ、あなたよ!」

その日、それまでのライトに対する仕打ちや鬱憤を晴らすように、カトレーヌさんはグスタフさんを責め続けた。

「はあ、ちよつとスツキリしたけど、物足り無いわねえ。なんかグスタフ弱ってるし」  
「その、大丈夫ですか？」

「いいのいいの。あんなリーダーの下にいたら、いくつ命があつても足りないわ。どうして今までうまくいってたのかしらねえ」

「それが不思議なんですよね」

なんとなく思う事がある。

私の想像上の友達と、イマジナリーフレンドリイトから時々聞こえてきた、少女の音が関係しているのかもしれない。

あの声が聞こえたときは、たいてい調子がよかった。

私はその声が聞こえるリイトに向かって、なんとなくお礼を言っていたのだけど、確信があつたわけではない。

今ではリイトもないし、あの声も聞こえなくなつてしまった。

「また、リイト君と会えるといいわね。アタシも会いたくなつてきた」



私の方が、ずっとリイトに会いたいと思ってるよ——。

ディアトリアの村が地図から消えたあの日。

両親を失って……収容された孤児院で、食事もとらず毎日泣いて過ごしていた日々。  
リイトが支えてくれたから、今の私がある。

彼がいなかったら……私はきつと……。

寂しい……会いたいよ。

でも、私のその想いは、願いは。

すぐに叶えられる……。

## 第16話 幸せな夜と聖女の儀式 — side マエ

リス

その日も、グスタフさんの調子は絶不調だった。

もつとも、私もカトレーヌさんも絶好調とはいいがたい。

私たち勇者パーティー同は、リイトの生活魔法に頼り切っていたことを思い知る。

【水生成】【食料生成】の魔法。

生み出される水やパン。

今では、街で買い込んだ保存食を背負って運んでいる兵士さんがいる。

【清浄化】の魔法は、とても重宝した。

カトレーヌさんなんか、おかわりを要求していたくらいだ。

それに、体臭がもともとキツかったのか、【清浄化】を使えない状況で、グスタフさんの周囲からみんなが離れていく。

「なんかね、酸っぱい匂いが……」

カトレーヌさんも呆れていた。

私たちも、ああならないように早めに水浴びをしたい。

王国軍兵士たちもイライラし始める。

「グスタフさん、話が違いますね。姫殿下は、リイトさんが色々と生活魔法を使って下さると聞いていたのですよ?」

「そ、それは……彼が勝手にパーティを抜けて……」

「本当ですかね? あなたが追い出したという噂がありますよ。それに、パーティメンターの管理はあなたの役目だったはずでしょう!」

「ひつ。ひいいいいい。申し訳ありません」

カトレーヌさんの責めには、もう少し反抗していたようだけど、王国軍の兵士が相手となるとそうはいかないようだ。

「勇者の称号は、まだまだ早そうだな」

王国軍兵士たちのそんな言葉に、グスタフさんは冷や汗をかいているようだった。そんな私たちに転機が訪れる。

「おい、あそこ！」

「おいあいつら、火をたいて夜営してやがる……あれ、はぐれた傭兵部隊じゃないか？ 無事だったのか？」

「オーガ・ジャイアントは？ この辺りに現れたはずだが……大狼やオーガの群も見えない……？」

兵士たちが歓声を上げている。

そうか、はぐれた傭兵部隊と合流できたんだ。

傭兵の人たちはグスタフとよく一緒にいた。

よく分からないけど、彼らには、まるでグスタフの悪乗りが伝染していたようにも見えたと。

合流することで面倒なことにならないと良いけど……。

少し憂鬱になる。

夜になったけど、周囲にはすっかり魔物の気配がなくなったので、安心してテントを張り夜営ができる。

私とカトレーヌさんは二人で準備をするとテントに籠もることにした。

「ねえマエリス。ちよつと傭兵さんたちが話してるのを盗み聞いたのだけど」

「は、はあ」

カトレーヌさんは暗殺者職<sup>ローグ</sup>だ。

さすがの諜報活動能力……かな？

「傭兵部隊の中に、ライト君がいるかもしれない」

「えええっ？」

「良い食いつきするねえ。なんだか、前と傭兵の人たちの雰囲気違ってて気になって調べてただけだよ」

「ふむふむっ」

「傭兵部隊の人たちとリイト君で魔物の群を倒していたみたいで。なんと、あのオーガ・ジャイアントも彼らが倒したらしい」

私たちが倒せなかった敵を、傭兵部隊とリイトが……？

「もう、ベタ褒めしててさ。彼は英雄になるとか何とか——」

「リリリ、リイトは、どどこどこにいるんですか？ はあはあ」

「落ち着いて、マエリス。深呼吸！」

「ふう……ふう」

私は胸に手を当てて自分を落ち着かせる。

「傭兵の隊長さんいたでしょ。彼に聞いてみたらいいと思う」

「わかりました！」

「ちよつ、待つて。好きな人に会いに行くのなら、身だしなみをしっかりしなきゃ。さつと汗も流して——」

私はカトレーヌさんから指示を一つ受けた。

胸をずっと押しつけろという指示だ。

こんな意味があるのかな。

私は隊長さんを探し、見つけた。

「あの、隊長さん。リイトはどこにいますか？」

「おや、久しぶりだねえ……。聖女候補のマエリスちゃんだっけ？」

「はい、お久しぶりです」

「それで、リイトさんのこと……。どこで知りました？」

あれ？

こんな年上のおじさんが、リイトを丁寧に呼んでいる？

「ああ、えつと……。こちらにしていると聞きました」

「誰だ？ まったく……。まあ、マエリスちゃんなら大丈夫か。付いてきてくれ」

私は、隊長さんについて歩いて行く。

くれぐれも、内緒に、と口止めされて。

「それで、ライトさんと聖女候補サマはどういうご関係で？」

興味深そうに隊長さんが私の顔をのぞき込む。

「幼——」

「ははあ、恋人ですね？」

「えっ?」

「さつきから、花の香りですかね? とても良い匂いがして……可愛らしくおめかしして……ははー。あの人も隅に置けませんなあ」

「え。えーつと……」

「うちの奥さんも、マエリスちゃんみたいに、とても清楚で可愛らしかったのに……今では尻に敷かれちゃって……ううっ」

「この人……こんなに気さくな人だったっけ? と思いつつ、付いていくと、ひとつのテントに通された。」



「お姫様、少々お待ちを——」

「もう。隊長さんっ」

そして通されたテントの中には——。

「ライト！」

離れていたのは短いはずなのに、随分懐かしく感じるライトがいた。

わたしは、たまらず駆け寄り、ぎゅっと抱きついてしまった。

私は何かとライトにくつつくように意識した。

カトレーヌさんに特に胸をくつつけると言われたけど、案外難しい。

そんなにおつきくないからなのかっ？

遠慮していると無理なので、もう全力でくつついた。

そうすると、ライトが赤い顔をしていたのが印象に残っている。

ライトの驚いたような、照れるような、嬉しいようなそんな顔、初めて見たような気

がした。

でも、私のことを大切にしてくれているのも伝わってきて。とても嬉しかったし幸せだった。

私は、彼に笑顔でいて欲しい。

その手伝いが出るのなら、何でもできる。

私はチコに会い、リイトと一晩を過ごした。

といつても、隣でくっついて眠っただけなんだけど。

朝になり、カトリーヌさんが待つテントに戻った――。

すると、散々カトリーヌさんに朝帰りしたことをからかわれてしまった。

「もう、マエリス。ずっと口元がニヤけてるんだから」

何度もそう言われてしまうほど、私の口の締まりは悪くなってしまったようだ。うー。

どうしても昨日の夜のこと――リイトの優しさを思い出して、思い出し笑いしてしま

う。

私のことで必死になったり、かわいいところも見れた。

準備をして野営地を出発。

昼前には、目的地に到着した。

「では、これよりディアトリアの廃墟に入る。各員、警戒を怠らないように！」

兵士の一人が、そう宣言して私たちは、私の生まれた村の跡に入っていく。

やっぱり、生まれた村だけあって、そこに見覚えがある建物がある。

カトレーヌさんは初めて来るみたいで、周囲をきよろきよろしつつ、時々、建物跡を見つめている。

「景色は、昔の記憶と同じなんだなって気がするなあ」

「マエリス、そうなの？」

「うん。建物が崩れても、ずっと面影は残るんだね」

廃墟はこうやって、以前の形を残しながら朽ちていくものかもしれない。

あれ？　そういえばライトには会わなかったけど、どこかにいるのかな……？

「一旦停止、各自周囲を警戒しつつ、待機！」

兵士の人が、そう号令をかけた。

そして、別の兵士の人が、私の元に近づいてくる。

「聖女候補のマエリス様、こちらへ。儀式の会場へご案内いたします」

「あ、はい」

「ちよつと、マエリスだけを連れていくの？　アタシはついていっても？」

「ダメだ。マエリス様のみ来ていただく」

「そ、そう……でも、どうして軍が……グスタフは姿が見えないし」

カトレーヌさんが問答している。

首をかしげつつも、渋々受け入れたみたいだ。

「じゃあ、いつてくるね」

「うん……マエリス、気をつけて」

少し歩くと、部隊から見えない位置に転移魔方陣があった。

その横に、ニヤついたグスタフさんがいる。

「マエリス、この転移魔方陣で、儀式の間に移動する」

表情は余裕そうだけど、実際にはグスタフさんは、すっかり兵士の人に使われているように見える。

それだけ今は立場が悪いのかな。

私は期待を胸に、気持ちを切り換えて転移魔方陣に乗った。

いよいよだ。

この儀式が終わって聖女の地位に就けたら、私はライトやチコとパーティーを組んで色んなところに行く約束した。

あと少し、頑張ろう。

## 第17話 ダンジョン探索開始

「マエリスが危ないかもしれない。あの騎士のボリスのたくらみを暴くために、行こう」  
「うん！」

チコと息を合わせ、階段を降りていく。

ランタンの明かりが薄暗く屋内を照らしている。

僕たちは、そのまま奥に入っていく。

うん、ダンジョンだこれ。

ぐるるるるるるううう。

僕のお腹が鳴って、チコが何か食べようと言いだした。

幸い、周囲に敵の気配はなさそうだ。

クリエイトフード  
【食料生成】の魔法を使う。

この魔法は、パンを生成する魔法だ。

失敗することが多いので習得する人は少ない。

もつとも、魔法が使える人はたいてい攻撃魔法など、強い魔法を覚えていく。

クリエイトフード  
「【食料生成】！」

『【食料生成】の解析を開始——成功しました。反則強化グリッチを実行しますか？』

んんっ？

強化グが使える？

今までは、味の付いた普通のパンが現れていたのだが……強化するとどうなるんだ？

「とりあえずYES」

『反則強化グリッチを実行——成功しました』

ほん！



と音を立てて、目の前の空中にパンが現れる。  
落下する前にパンを受け取って確認する。

「このパン——ハムと野菜が挟まれている……?」

「え? すごい! リイト」

「いや、謎だ。謎すぎる……チコ、何か知らない?」

「チコは何でも知ってるわけじゃないの」

「そっか、ごめんな」

申しわけなさそうにしているので、頭を撫でてあげる。

すると、チコは気持ちよさそうに目を細めた。

そもそも、「水生成」と違って何を元にパンを作るのか不明。

近くのパン屋から転送してるのではとビクビクした時があった。

でも、違うようだし……僕は深く考えるのをやめた。

「美味しいねー、リイト」

「う、うん」

妙に美味しいのも謎だ。誰が作ってるんだ。まあ良いかと歩きながら食べていると――。

「動くな……そのパンを寄越しなさい！」

背中に誰かが立ち、小刀ダガーを僕の首元につきつけられた。

チコを守らなければ、と思うのだが身動きが出来ない。

声は女性のもの。

しかも、ふかふかした柔らかいものが僕の背中に触れているし、本気で脅している感じはしない。

でも、逆らわない方がいいだろう。

「わ、わかった」

「よし」

あれ？

でもこの声……?」

「あの、もしかして、カトレーヌさん?」

「……………ふう、バレたか。油断しすぎよ、リイト君」

なんと、僕の背後にぴたりくつついて声をかけてきたのは、勇者パーティにいた暗殺者職のカトレーヌさんだった。

相変わらずキリツとして綺麗なお姉さんだ。

黒を基調とした露出の高い服装で、妖艶な雰囲気。

スタイルもよくて、男の人をもてあそんでそうに見える。

カトレーヌさんにパンを食べて貰いながら、互いに情報交換をする。

「カトレーヌさん、どうしてここへ?」

「アタシは、連れて行かれたマエリスをこっそり追いかけたの。それで見つけた転送魔方阵を踏んだら、ここに飛ばされて……もぐもぐ」

騎士ボリスか……と腕を組んで考え始めるカトレーヌさん。

集めている情報を頭でまとめているようだ。

「ライト君に会えて良かった。ごめんね……パーティで一緒の時にグスタフの仕打ちに庇ってあげられなくて。お詫びとして、ライト君さえよかったら、私を好きにしても——」

カトレーヌさんが、また僕の後ろにまわりぎゅつと抱き締めてくる。  
柔らかさと暖かさが背中に伝わってくる。

「ライト君、遠慮しなくても……私は少しは経験があるから」  
「え、ええとですね」

ちよつと妙な雰囲気になりかけたとき、じーつと僕らを見ていたチコが話しかけてくる。

おお、助かる。

「ライト、この人……?」

「……元仲間だよ。マエリスの友達」  
『友達？』  
アイデンティファイ  
【識別】！ 反則強化グリッチを実行  
『えっ？』

鑑定魔法が起動した。

いや、チコに起動させられたのだ。

### 鑑定結果

名前：カトレーヌ

年齢：20

性別：女性

身長：165

体重：49

所持品：暗殺者の小刀

以下、追加情報

B・W・H : 89・58・86

リイトに対する感情：好意あり・罪悪感あり

悪意：なし

敵意：なし

男性経験：0

『

敵じゃなかった。よかった』

僕の魔法を起動することができるのか？

「チコ……鑑定魔法起動してどうした？」

「ん？ なあにリイト？」

チコはきよとんとして僕に聞き返した。

無意識だったのかな。

だいたい鑑定内容に、なぜ毎回スリーサイズがあるんだ？

などと悩んでいると、カトレーヌさんが眉をひそめて言う。

「その小さな子誰？ ま、ま、まさかつ……マエリスとライト君のこ、子供？」  
「あー、そういうのいいです」

大げさに驚くフリをするカトレーヌさん。

僕は軽くスルーして、リコを紹介し簡単に説明した。

「ふうん。不思議な子ね。チコちゃんね。よろしく」

「うん！ よろしくね」

「あのカトレーヌさん、経験が無いって。あの、無理されていませんか？」

「えっ、なぜそれを……」

あ。

すると、彼女は突然顔を真っ赤にして、反対側を向いた。

「い、いや……あの、その……。ライト君に何かしてあげたくて、アタシはこれくらいしかないから」

「僕は気にしていませんから、無理されなくても——」

「うう……その、そうよ！ 全部妄想よ！ 本とか読んで男の人が喜ぶかなって思っ  
て！」

「は、はい」

カトレーヌさんは、耳の先まで真っ赤にして、白状を始めた。

うん、これなら鑑定魔法要らないな……。

「そ、そんなことより、先に進みましょう。アタシが前に出るから」

「はい……お願いしていいですか？」

「先頭で罨を警戒するもアタシの仕事だし……リイト君に対する罪滅ぼし——」

「え？」

「ううん、何でもないわ。お姉さんに任せなさい」

少しだけ賑やかになった。

僕はカトレーヌさんを先頭にして、慎重に先に進んでいく。



第18話 暗殺者のナイフ ～VS 上位悪霊《ワイト》

（

「じゃあ、このダンジョンをとつと探索して、マエリスを探しちゃいませよ」

「うん」

「はいー！」

三人パーティーになった僕たちは先に進んでいく。

さすがにカトトレーヌさんは、暗殺者職<sup>ローグ</sup>だけあって、<sup>インビジビリティ</sup>【隠形】のスキルを使って身を隠し進んでいく。

周囲を警戒しながら僕たちを導いていく。

生きている者は音を立てる。

息づかいや足音など。

それを先に察知し、避けたり先制攻撃を行う。

生きていなくても、食屍鬼<sup>グール</sup>などは地獄の飢えと苦しみにうめき声を上げている。

「ううううううううー」

「グール三体。リイト君、お願い！」

「了解！『水生<sup>クリエイトウォーター</sup>成！』『《グリッチ》実行』」

ザザザザザザ……。

水分を抜かれ粉々になって食屍鬼<sup>グール</sup>が崩れていく。

僕の手の先からは、透明な水が流れ出す。

「リイト君、これ、普通の水だよね？ 飲めるよね？」

「普通の水です。飲めますよ？ ただ、元がグールなので、グール汁ですが……」

「グール汁——やっぱ……いい」

アンデッドは音を立てない奴らもいる。

「ごめん——リイト君」

申し訳なさそうに、カトレーヌさんがうつむいた。

その部屋に現れたのは、上位悪霊<sup>ワイト</sup>。

ボウツと薄く高位の貴族のような服装の亡者が部屋の反対側に見える。

「触れられると生命力を吸われるし、魔法や、魔法の武器しか効かない敵よ。リイト君、何か良い魔法ない？」

「厳しいかも」

もともと水分がないアンデッドだ。

「《クリエイトウォーター》は効かないだろう。

<sup>イグニッション</sup>【発火】はこんな密閉空間で使ったら、熱で僕らの方もやられてしまう。酸欠も心配だ。

逃げてても良いけど、どうもこの敵を倒さないと先に進めないようだ。

一応、鑑定してみるか。

「アイテム識別！」「グリッチ強化！」「弱点！」

名前：上位悪霊ワ上位

脅威度：B級

属性：アンデッド

備考：魔法、および魔法を帯びた武器でしか攻撃が当たらないよ

所持品：宝箱

追加情報

弱点：聖属性魔法、聖属性武器

』

何か、戦利品となるようなアイテムを持っている。

おそらく、通路とそれを守っているのだろう。

「カトレーヌさん、魔法の武器はありますか？ 聖属性だと最高ですが」

「うん、あるわ。でも、接近するのは厳しいかも。触れられたら即死」

「ナイフを投げるのはどうでしょう？」

「えっ？ アタシ投擲は苦手なの」

暗殺者のナイフという魔力を帯びた武器を、カトレーヌさんは持つているそうだが、しかし投げて当てるのは苦手だという。

確かにこのナイフ、少し刃の部分が大きく孤を描いている。

投げて、まっすぐ飛ばないだろう。

でも僕には「百発百中」がある。

あとは、ナイフは一つだけだから可能なら強力にしたい。

チコが声をかけてくる。

「リイト、【清浄化】<sup>パージ</sup>の魔法をグリッチして、そのナイフにかけるの」

そうか、【清浄化】のグリッチが使えるようになっていたんだった。

僕は、カトレーヌさんからナイフを借りて魔法を発動する。

「【清浄化】！」

『【清浄化】の魔法を解析するね——成功したよ！グリッチする！』  
『成功！ 影響を与えたいものに触れて』

僕が持っている暗殺者のナイフに淡く光が灯る。

『暗殺者のナイフに聖属性が付与されたよ。「聖者と暗殺者のナイフ＋１」に変化した  
の』

第19話 新たな魔法 ～VS 上位悪霊《ワイト》～

よし、うまくいった。

ナイフに聖属性が付加されたので、カトレーヌさんに手渡す。

「カトレーヌさん、僕を信じてこのナイフを投げて下さい。必ず当たります。

トウルーストライク  
【百発百中】！」

ググ  
『反則強化！ 対象の肩に触れて！』

僕がカトレーヌさんの肩に触れると、彼女はビクツとした。

「えっ？ リイト君？」

「大丈夫。繰り返しますが、必ず当たります。僕を信じて！」

「う……うん」

カトレーヌさんの瞳が虹色に変わる。

が、彼女自身は変化を感じていないみたいだ。

僕は、肩を掴んだ手に力を込める。

「まだ距離があるうちにナイフを投げてください。きつとうまくいきます」

「う、うん……わかった。ライト君を信じる！」

なぜか耳の先まで赤くなったカトレーヌさんは、思い切りよくナイフを投げた。

ビュンツと空気を切り裂く音を立てて、ナイフが飛ぶ。

曲がっていて、変な形をしているのにもかかわらず、そのナイフはまっすぐ飛んでワイトに突き刺さった！

「す、すごい……今の何の魔法？ クリティカル 会心の一撃だったかもしれない」

カトレーヌさんは手応えを感じたようだ。

嬉しそうに僕の手を取って喜んでいる。

しかし、一瞬揺らいだものの、ワイトは消え去らなかつた。



ナイフが床に落ちカランと音がする。  
投げる武器がなくなった。

その時――。

「ライト！ これいるよね！」

なんと、目を離れた隙にチコが、ワイトに接近してナイフを拾っている。

「チコ！ 戻れ！」

ワイトは、チコに向かっていく。  
くっ。

僕は走り出すが……間に合わない。

「チコちゃん！」

カトレーヌさんも叫ぶ。

ワイトがチコに向かって腕を振り上げるのが見えた。時間の流れがゆっくりに感じる。

——ワイトの腕がチコに直撃したのが見えた。

「チコー——！」

その瞬間、バチツという音と、光で部屋が包まれる。  
ん？

光が消え様子が見えるようになった。

チコに迫ったワイトは、首をかしている。

チコが僕らの方に戻って来た。

けろりとしていて、なにか攻撃を受けたような様子はない。

「お姉ちゃん！」

「ありがとう」

チコが拾ってくれたナイフをカトレーヌさんがもう一度投げ、ワイトに直撃。亡者は音もなく、断末魔の叫びも無く消えていったのだった。

上位悪霊。

脅威レベルはB級の大物だが、レベルの低い僕を含む三人で倒すことができた。

「リイト君！ やった！ やった！ やった！ すごいよあの魔法！」

「リイトお！ やったね！」

二人が抱きついてくる。

はあ、危なかった。

パーティーで協力し、戦闘の経験を獲得したことを実感する。

頭の中に、チコの声が響く。

『経験値を獲得したよ！ 新しい魔法が使えるようになった！』

新しく使えるようになったのは、以下の魔法だよ！

【ウインド風】（そよ風を生むことができる。体や髪の毛を乾かすのに便利）

【ミラー鏡】（体を映すほどの大きさの鏡を一定時間生成できる）

『

うん。

どちらの魔法も生活魔法だな……。

第20話 年上の女性に素敵ねと言われて……（1）

上位悪霊《ワイト》を倒した。

大量の経験値を得て、僕は二つの呪文を覚えた。

僕が使える魔法を確認しておこう。

ライト、使える魔法は以下の通りだよ。

■火属性

イグニッション

【発火】

■水属性

クリエイトウォーター

【水生成】

■風属性

ウインド

【風】（新規！ グリッチ可能！）

■無属性

ミラー

【鏡】（新規！ グリッチ可能！）

トウルーストライク  
【百発百中】

ソーマタージ  
【小奇跡】

アイデンティファイ  
【識別】

メッセージ  
【清浄化】（グリッチで聖属性）

メンディング  
【伝言】

ライト  
【軽修理】

クリエイトフード  
【光】

【食料生成】

↳

全部……全部、生活魔法だ。

新しく覚えた魔法【風】と【鏡】は、お風呂上がりや顔を洗った時に便利そう。

「はあ……」

攻撃魔法なんかきつと覚えないのだろうか。

まあ、僕には反則強化があるさ。

「リイト君！ あの上位悪霊ワライトを倒せるなんて……。アタシ、ナイフの投擲が苦手で諦めていたけど、また練習してみようかな」

カトレーヌさんは、興奮が冷めないようで、僕に抱きつき、僕の手を強く握って言った。

「接近戦に加えて、ナイフ投げも出来れば強いですね」

「こんな前向きになるなんて……。リイト君のおかげね。ありがとう！」

僕の魔法が切れてからカトレーヌさんがナイフを投げてみたが、まっすぐ飛んで壁に突き刺さった。

彼女なりに、「百発百中」の魔法を帯びていたときの感覚を掴んだのだろう。

本当は針の穴に糸を通しやすくするための生活魔法なんだけどな。

僕はつられて嬉しくなった。

「カトレーヌさんの助けになれたのなら嬉しいです」

「うん、本当に……。それで、宝箱が現れたわね？」

「そうですね。この　どうやら、ワイトは奥の通路と、奥の宝箱をも守っていたようです  
ね」

と、そういえばチョコはどこだ？　と思つたら……。

チョコが宝箱を開けようとしている。

「ダメよ！　罨があるかもっ!!」

二人で駆けつけようとするがもう遅い。

ギイイー。

音を立てて、箱が開く。そして。

カチツ！ビュツという音がして何か飛び出し、カトレーヌさんの横をかすめ、壁に刺さった。

「チョコ！」

「ワイトお。なあに？」



んん？

チコは無事だ。

よかった。だけど。

「ライト君、罨が仕掛けてあつたみたい。矢が飛び出す仕掛けが」

「うん。チコ、危ないから不用意に宝箱に近づいたり、敵に近づいたらダメだよ？」

「うん……ごめん。ライト」

僕は素直に謝ってくれたチコの頭を撫でた。

そのたびに、チコは気持ちよさそうに目を細める。

頭を撫でられるのが本当に好きなんだな。

「で、箱の中は何があるかな？」

「ライト君！ これ！」

そこには、聖女着と指輪が入っていた。

見覚えがある。

マエリスが身に付けていた聖女着と、僕のお揃いの指輪だ。

「マエリス……。この近くにいるのか？」

「多分、そうだと思う。ここで上着を脱がされ、指輪を外されて連れて行かれた。そんなに遠くない」

「マエリスう……」

マエリスの危機をを察しているのか、チコが僕に抱きついてきた。  
急ごう。

「鍵がかかっているわね。開けるわ」

「うん。手元、明るくしよう。【光】ライト」

僕が呪文を唱え、壁に光を灯す。

「ライト君、ありがとう。いろんな生活魔法……今さら……こんなに大切なものだったのに。失って分かる事ってたくさんあるわね」

「そうなんですか？」

僕は人に求められるということが、今まであまりなかったように思う。

「うん。ここでライト君に会ったとき、アタシ……無意識に誘惑しようとしたのかも。いけない。ずっと近くにいて、こういう魔法を使ってくれて。アタシは都合良すぎよ。ごめん」

「いえ、そんな。大切なものだと思って貰えるなら、嬉しいです」

カトレーヌさんは、一瞬だけ手を止め、僕の顔を見た。

しかし、すぐに視線を鍵に移し、手を動かし始める。

「ほんの少しだけど、あなたと一緒に行動しててね、あなたがどれだけマエリスを大切に思っているのか、分かったような気がする。それはマエリスも一緒なんだなって」

「付き合いの長い幼馴染みですから」

「もう。そういうことじゃなのだけど。でも、そういうところも素敵ね」

「素敵、ですか？」

「はあ……。やっぱりあなた……。マエリスも……。かなわないなあ。まあ、私が勝手に……。なら、いいよね？」

「はい？」

その瞬間、鍵穴からカチャリと音がした。

「ううん、なんでもない。ほら、開いたわよ。行きましょう！」

「はい！」

僕は奥の部屋に進む。

そして、いくつかの部屋を超えていくとカトレヌさんが扉の前で立ち止まった。

「ライト君、次の部屋に誰がいるわ。二人、多分人間。そして、アタシたちを待ち構えて

いる」

「チコ、静かに」

「うん」

僕は、簡単に打合せをする。

迷いはない。

突入だ！

「じゃあ、作戦通りに」

「はい！」

バン！

僕は大胆に、大きな音を立て扉を開き突入した。

「お前ら、俺たちに勝てるんでも——」

「ヒュウツ。なかなかいい女じゃないか。楽しめそうだなあおい。ガキと男は殺せ！」

この人たち、本当に王国兵士なのだろうか？

「敵はやつぱり兵士二人、リイト君！ 一人は任せるわ！」

「はい！」

僕とチョコは息を合わせて部屋に入る。

カトレーヌさんは、さっと視界から消えるように走り出す。

「ミラー鏡」！」「グリッチ！」

突然現れた複数の鏡に、王国兵士が怯んだ。

カトレーヌさんのスキルで、この部屋の状況が筒抜けだった。

状況を把握し、より有利な作戦を立て、準備をした方が勝つ。

「あなた……動くところのナイフが喉を切り裂くわよ」

「くっ。クソッ!!」

クリエイトウォーター  
「水生成」！」「グリッチ！」

「グツ……苦しい」

た。その予想通り、屈強な兵士たちとの戦闘は僕たちの勝利であっけなく終わったのだっ

## 第21話 年上の女性に素敵ねと言われて…… (2)

「じゃあ、私がこいつら縛り上げるから、ちよつと待つてて」

兵士たちとの戦闘は勝利に終わり、カトレーヌさんが素早くロープで縛り上げている。

「カトレーヌさん……趣味丸出しですね」

「この縛り方好きなのよね」

彼らの体に食い込むロープは丁寧に縛られていて、亀の甲羅のような模様に見える。カトレーヌさんは口に笑みを浮かべて、やけに生き生きとしていた。

「くつ。こんな事をして……お前ら、タダで済むとは思うなよー!」



兵士が強い口調で言うけど、ロープの模様が面白くて、怖くなかった。カトレーヌさんは、笑いそうになるのを堪えている。

「ぶぶ……じゃあ、ライト君とチョコちゃんは、ちよつと隣の部屋で待つてて」

「あ、はい」

「ライトお、どうして？」

「カトレーヌお姉さんとおじさんは、これからお話があるんだって」

「そうなの？ わかった！」

お話と言っても、暗殺者職<sup>ロー</sup>が得意とするスキル、拷問だ。

「——お前たちは、ライト君やチョコちゃんを殺そうと考えた。アタシはね、それが我慢ならないの」

チョコに見せるのはよろしく無さそうなので、僕は隣の部屋に移動ししばらく待つことにする。

兵士の悲鳴が小さく聞こえた。

ダンジョン内の壁は厚く、声は通りにくいようだ。

カトレーヌさん、絶好調だったな……。

ああ……かわいそうに。

僕は、兵士の人たちに同情したのだった――。

僕は、その悲鳴が収まるのを待つてから戻った。

部屋に戻ると、やや顔を上気させたカトレーヌさんがこの先の状況を説明してくれる。

「はあ、はあ……いろいろと情報を引き出せたわ。やっぱりこの先の『儀式の間』にマエリスがいるみたい……はあ、はあ」

興奮が覚めないみたいだ。

よっぽど充実した拷問タイムだったのだろう。

「お、落ち着いて」

「ご、ごめん。久々でちよつと張り切り過ぎちゃった」

舌をペロリと出すカトレーヌさん。

「ほかにはグスタフがボリスたちと一緒にみたい」

「グスタフ！ どうしてここに？」

あいつらグルだったのか。

もしかして、僕を追放したのも計画的で……？

「マエリスを何かの儀式に使おうとしている」

「聖女の儀式ってマエリスが言っていたけど」

「こんなコソコソとダンジョンの奥で……ロクな儀式じゃないと思う」

「確かに。急ぎましょう」

「うん。準備には時間がかかるみたいだから、まだ無事だと思うけど、気になることが

あつて」

気になること？

「それってどういうう？」

「どうやら『魔王』と呼ばれる者までいるみたいだけど……ううん、これはきつと間違いかも。忘れて」

「は、はあ。でも、魔王って……。王国が勇者を育成しようとしているのも、復活の兆しがあるからって聞いたことがありますか？」

「でも、こんなところにいるのかしら？」

確かに。

もつと大きなお城にいるイメージがある。

まあ、魔王がいないとすると、敵の人数はそう多くないようだ。

問題は勇者候補のグスタフ。

でも、クリエイトウオーター「水生成」の魔法があるし、それが効けば大した障害にはならないだろう。

「リイトお、行くこう？」

チコが、僕の手を引く。

「ああ。そうだな」

僕にマエリスを救う以外の選択肢はない。

「リイト君」

「はい？」

「くれぐれも……無茶しないで」

「それは、たぶん無理です」

「わたしもむりー」

僕もチコもやる気に満ちていた。

「そう……そうよね。二人とも、本当に迷いが無いわね。じゃあ、アタシも覚悟を決めま

すか」

そう言つてカトレーヌさんは息を飲む。

意識を合わせた僕たち。

もし魔王がいても、なんとかかなりそうな、そんな気がした。

僕らはダンジョンの最奥の「儀式の間」に突入する。

## 第22話 お姫様の目を覚ますために必要なのは、王子様の……

儀式の間、そう呼ばれる部屋の中に入る。

おそらくここがダンジョンの最深部だ。

「儀式の間か。床いっぱい、魔方阵が描かれている」

それほど広い部屋ではない。

その中心にいるのは――。

「マエリス！」

僕は魔方阵の真ん中に駆け寄った。

マエリスを抱き起こす。

「すう……すう」

マエリスは静かに息をしていて、胸が上下している。  
眠っているだけのように見えた。

「マエリス……マエリス！」

「うう……ん……リイト……」

目覚めそうだ。

外傷も見られず、肌着だけではあるが乱れもない。

白い肌に傷一つついていない。

僕は、ほっと安心した。

「うん、マエリスは無事みたいね。よかった」

「はい。あとは目を覚ませばいいのですが」

「はあ、リイト君。こういうときはどうやって目を覚ましてあげるのか、知ってる？」

「えっと？ 顔に水をかけるとか」



「リイト君さあ、拷問じゃないんだから——」

カトレーヌさんは大ききため息をついた。

「——王子様の甘い口づけに決まっているでしょう!!」

すごく得意げに言っている割には根拠はなさそうだ。

本当に意味があるのなら、僕はマエリスにならしてもかまわないけど。

自分が王子様なのだろうか。

「しょうもないこと言っていないで、カトレーヌさんも起こすの手伝ってくださいよ」

「リイトくんさあ、そういうところはちよつと——」

そのとき、別の声が割り込む。

何者かの気配が部屋に入ってきたことを感じる。

「これはこれは、皆さんお揃いでありんすね」

突然、深く響く女性の声が聞こえた。

カトレーヌさんよりずっと落ち着いた、低い女の人の声。

「聖女殿に、グリッチIIコード反則呪術使い……それに、《グリッチIIコードグリッチIIコード》本体でありんすか」

声の方を見ると、そこには騎士のボリス、そしてグスタフに魔法使いのような服装をした女性がいた。

だが、その女性は無表情で……顔が殴られたように腫れている。

声はボリスの口から出ているけど……様子がおかしいな。

彼からは黒いオーラのようなものが見える。

カトレーヌさんが庇うように僕らの前に立つ。

「あなた、王国騎士のボリスでしょうか？ 何のつもり？ しかも私を無視してくれちゃって」

「主さんには用はありません」

ボリスが手を振ると、カトレーヌさんが突然胸を押さえ、血を吐き出した。カトレーヌさんの体に蛇のような入れ墨のような黒い線が入っていく。

「ボリス！ 一体何を？」

ボリスは、いや、ボリスの身に乗り移った何かは、僕らを見捨てるようにチコに話しかける。

「グリッチコード。こちらに来なんし」

「……………はい。マスター」

は？

チコ？

チコの瞳から光が消え、深い黒色になっている。

その瞳からは、涙がこぼれていた。

「ライト……………行きたくない……………帰りたいくない……………助けて」

まるで僕に懇願するように……小さく、彼女の口が動く。

「チコ？ どうした？ 行くな！」

「チ……チコちゃん……駄目！」

僕らの制止も聞かず、チコはまっすぐボリスの元に歩いて行く。

「主さんたちは、あちきの子とどういう関係なんでありんすか？」

「あんたの子？ まさか？」

「ははあ、まさかコレが人間だとも思いんした？ コレは——形こそ人間に似せてやすけど——」

「やだ……やめて……」

チコから、言葉にならない声が伝わってくる。

「残念、コレは、単に魔法が実体化したモノでありんすよ。単なるモノ！ 単なる魔法！」

「主さんのような人間ではありんせん」

その瞬間、黒い光がチコから放たれる。

黒い光は、深い絶望が可視化したもののようにも思えた。

「はい、これで終了でありんす。人間じゃないなら、主さんにとってどうでもようござりんすよね？」

ボリスの顔はチコの絶望を満足げに受け止め、にやりとしている。

——僕は素直に聞き返す。

「全くわからないから教えてくれ」

「いいでありんしょう」

「それが何か？ それがどうした？ チコ、嫌なら行くな。行かないでくれ」

まるで勝ち誇ったような表情をしているボリスに対して、純粋な疑問をぶつける。

すると――。

「はーん」

一瞬にして、その勝ち誇った表情が崩れ去ったのだった。

## 第23話 もう二度と、頭を撫でてもらえなくても、あなたにかけたいもの

僕の一言に、あつという間に余裕の表情が崩れ去ったボリス。

いや、それに取り入っている女。

もしかしてこの女が……魔王？

「リイト……リイト……えへへ……うん……ありがとう」

泣き濡れたチコが振り返り、いつもの笑顔を見せて僕に言った。

うれしい、そんな素直な感情が伝わってくる。

何かに満足し、何かを諦めた意思も。

「まさか、希望を生むとは思わなかったえ。 どうして感情なんか生まれたのでしょ  
うかえ？」

ボリスはチコに対して手を振りかざす。

歩みが止まりかけていたチコだったが、再びボリスに向かって歩き出した。同時に、チコの声が聞こえなくなる。

「おい、チコに一体何をした？」

「何って、これは躡シツケでありんす」

何を当たり前のことを、というようにヤツは答えた。

僕らの制止も聞かず、チコはまっすぐボリスの元に歩いて行く。

と、このタイミングでマエリスが意識を取り戻した。

「はつつ？ リイト……カトレーヌさん？ チコ？」

彼女はすぐに状況を把握したようだ。

眠りながら聞いていたのかもしれない。



「チコ！ そつちに行つちやだめ！」

僕に抱かれながら、チコの背中に手を伸ばすマエリス。

しかし、チコからの返事はない。

「聖女殿もお目覚めでありんすか。計画通りにはいきんせんね。これも全て、あの  
グリッチコード  
反則呪術使いの力でありんすか？」

ボリスは隣にいるグスタフに目をやった。

「くつ。今、おとなしくさせましょう。それに、聖女がもういらないのであれば、俺が好  
きにしてよいでしょうか？」

「役立たずに与えるものなどありません」

「はい？ それでは約束が——」

ん？

あいつら、一体何の話をしている？

「とにかく、あの男は危険でありんすね……」

ボリスが、今度は僕に手の平を向けてくる。

「サンクチュアリ聖域」！」

マエリスが呪文を唱えると、キーン！ という音とともに、僕らの周りに透明な板が現れ、囲まれた。

これは聖女魔法の一つだ。

外からの攻撃をはねのけ、安全地帯を形成する。

その力に阻まれ、ボリスの放った黒い力が飛散する。

「ふむ。聖女のほうは力も確かなようでありんすね。しかも妙に強力でありんす」

「あなたなんかには、チコは渡さない。涙を流して……嫌がつて……ツライ思いをさせて

……その報いを受けるべきよ」

マエリスの怒り。

僕は、初めてその表情を見た。

しかし、チコはついにボリスの元へたどり着きつつあった。  
くっ。

なんとかして止めないと。

この状況で反則強化グリッチIIコードが使えるか？

やるしかない。

僕はボリスに標的を合わせる。

「クリエイトウオーター水生成！」

チコ、そして《グリッチIIコード》！

僕の声に、応えろ！

『——大丈夫、わたしは、リイトの中にここにもいる！——反則強化グを実行するね！』  
『同時に聖女魔法の解析もはじめるね！』  
『そして……力を——あなたに』

その声は慣れ親しんだ、僕の内側から聞こえていたもの。  
紛れもないチコの声だった。

## 第24話 甘えてくる幼馴染みをどうするか……

## S スカルドラゴン

魔王が操っていると思われるボリスに標的を合わせる。

『クリエイトウォーター水生<sup>成</sup>』の魔法を反則強化<sup>グ</sup>するね——成功したよ！』

僕の手の先から、水がしたたり落ちる。

同時に、ボリスの顔が真っ赤になっていく。

「ぐ……。何を……」

「ライト、お前……いったい何をした？」

彼の——男の声が漏れた。

ボリスが倒れ、もがきながら床を転げ回っている。

苦しむボリスを見て、グスタフは目を見開き驚いている。

そうだ。グスタフはこの魔法を知らなかったな。

敵対するようなら、容赦なく使おうと思う。

チコの歩みが止まった。

そして、僕らの元に戻ってこようとしている。

やった！

「騎士といえど脆弱でありんすね……仕方ありません」

ボリスが目を閉じたかと思うと、細い黒い糸のようなものが体から湧き出て、全身を覆った。

何か黒い繭のようなものに包まれ、そこから全く別の者が姿を現した。

カトレーヌさんより露出が高く、必要最小限の黒い布しか身につけていない。

「悪魔……か？」

グスタフがまた目を見開き、それを凝視した。

さつきから開きっぱなしだ。

「そんな下等なものと一緒にしねえでおくんなんし。あちきは……そう、魔王」  
「ま、魔王——」

今さらのように、グスタフが驚いている。

まさかずっとボリス本人だと思っていたのか？

「全然足りせんね……やはり勇者や聖女クラスでなければ」

そう言って、ボリスだったもの——魔王はマエリスをにらむ。

隣のグスタフでは話にならない、とでもいうように。

「ライト、あれなに？」

「どうやら魔王らしい」

マエリスは僕に抱かれたまま、僕の手を握り、まるで魔王の視線から守るように胸の辺りに手を置いた。

もう元気そうだし、そろそろ立てそうだな。

「もう、大丈夫？ 立てる？」

「……このままがいい」

「はあ？」

「ダメ？」

甘えてくるマエリスを、説得して立たせる。

立ち上がった後も、手だけはつないだまま離してくれない。

僕らはマエリスの「サンクチュアリ聖域」に守られているため、そんな余裕が生まれていた。

チコが僕らの近くまで戻って来た。

僕とマエリスは、彼女を間にして、それぞれ手を？ぐ。

「ライト！ マエリス！」

チコは、いつも以上にはにかんで、僕とマエリスを交互に見た。

色々話したそうだけど、後回しだ。



「あちきの前でイチヤつくなどいい度胸でありんすね。そんな小賢しい魔法など、今すぐ砕きんしょう！  
【不死者生成】クリエイトアンドッド！」

地響きとともに、現れたもの。

巨大な……家ほどの大きさの、骨だけになった——アンドッドのドラゴン。あまりに大きいため、部屋の壁を破壊して広くしてしまった。

「ス、スカルドラゴン？」

グスタフが腰を抜かしている。

確か、脅威度Aの死をまき散らす怪物だ。

「アイデンティファイ 識 別 ！ 」

識別結果だよ！

名前： スカルドラゴン

脅威度：A級（街一つを滅ぼす）

属性：アンデッド

備考：魔法、および魔法を帯びた武器でしか攻撃が当たらない

火・水・風・土属性魔法無効

攻撃：

爪、牙：即死攻撃あり

ドラゴンブレス：アンデッド化するガスをまき散らす

所持品：なし

追加情報

弱点：聖属性魔法、聖属性武器

↳

確かに、スカルドラゴンは格別に強いのだろう。ただ、僕には強い危機感はない。

「じゃあ、いくわね！ ダーン・アンデッド【不死者退散】！」

マエリスが先手を打つ。

## 第25話 あなたを信じて ～VS スカルドラゴン～

「スカルドラゴン……アンデッドなら聖女の私が！」  
[不死者退散]ターン・アンデッド

マエリスが掲げた指先から光がほとぼしる。

《ターン・アンデッド》は、アンデッドを戦闘の場から逃走させるスキルだ。

しかし、一瞬動きを止めただけで、スカルドラゴンはビクともしなかった。

「はあい、いくら聖女の《ターン・アンデッド》でも、脅威度A級のスカルドラゴンには効きませんよ」

魔王がニヤついていった。

再び余裕の表情で、僕たちを嘲笑うかのようにな。

「じゃあ、せっかくなので、おかわりをあげんしょう」

魔王が再び、「不死者生成」を使った。

今度は無数のグルルやスケルトンが周囲に現れる。

数百はいるだろうか。

操られたアンデッドたち。

彼らは僕ら、つまり獲物を前に——骨の鳴る音や、うなり声——歓喜の声を上げた。

だけど、僕は怯まない。

なぜなら——。

『《ターン・アンデッド》の解析開始——。成功したよ！』

チコと視線を交わす。

でも、マエリスが不安そうに僕を見つめた。

「ライト、どうしよう?」

「大丈夫。もう一度『ターン・アンデッド』をやってみようよ」

「ううん、ダメ。私の力が足りないの」

俯きそうになるマエリスの視線を僕は拾う。

そして、何も言わずにマエリスの目を見て、頷いた。

僕を信じて。

口には出さない。

その方が、伝わると思ったからだ。

「ライト……うん、もう一度、やってみる」

顔を上げ、アンデッドのボス……スカルドラゴンを見上げるマエリス。

その横顔は、凛々しくて美しい。

彼女の芯のある声が、ダンジョンの部屋に響く。

「じゃあ、もう一度！」

『<sup>グ</sup>反則強化<sup>リツ</sup>を行うね？』

「YES!!」



鳴り響いた。

それは、スカルドラゴンも例外ではない。

無数の骨が、飛び散り、砕け散っていく。

砕け散ったアンデッドの破片は、光の粒となって天に向かっていく。

一瞬にして、戦況がひっくり返った――。

「す、す……」

自分で行ったことなのに、マエリスが言葉を失う。

「おい……あれは何でありんすか。そう……《グリッチコード》と聖女の力でありんすね――」

魔王の様子がおかしい。

どういうわけか、魔王自身もダメージを受けているように見える。



いよいよ、  
余裕がなくなってきたようだった。

## 第26話 勇者候補に迫る破滅 ～VS 魔王～

「リイト……脅威度A級のスカルドラゴンを倒した……！」

「うん。すごいな、マエリス」

「ううん、グリツチはリイトの力なんでしょう？　すごいのは、リイトよ」

「いや、これはチコの——」

といいかけたところで、チコがそうじゃないと首を振る。

力を引き出したのは、僕のおかげだと言うように。

僕は、チコの頭を撫でてあげた。

『経験値を獲得——グリツチの対象が増えた』

チコの声が聞こえた。

魔王は、この状況に驚いている。

恐らく、ヤツの力はまだ完全じゃないのだろう。

憑依した体にも満足していないようだ。

「以前、チョコに【誓約】<sup>キアス</sup>の魔法……呪いがかかっていた。また今、チョコに【誓約】がかけてられている。これが駄目だと？ ふざけるな……」

チョコは、ニコニコしてるが、以前と違い、今は僕に助けを求めている。

一つ、僕には確信めいたことがある。

多分、僕の生活魔法の一つは、この魔王に効く。

「【清浄化《パージ》】！」

『【清浄化】の魔法を解析するね……成功したよ。反則強化<sup>グリッチ</sup>——レベル2を——実行する？』

「YES！」

『レベル2グリッチ——成功したよ。標的を選択して！』

僕は、魔王を指し示す。

「ぐ、あつ。主さん……やめ……」

突然苦しみはじめる魔王。

【水生成】よりも確実に効き目があると思い、【清浄化】を使う。

それなりのダメージが与えられるだろう。

尋常じゃない苦しみ方を見ると、もう一発【清浄化】を使えば止めになりそうだ。僕は、もう一度発動しようと構えつつも、少し考える。

「ぬ、主さん——コレ<sup>チコ</sup>は、まだ秘密がある。その正体は——」

チコがくれたもの……優しい笑顔に僕は力づけられてきた。彼女が何者であるのか、些細な問題だ。

「チコ、倒したらダメか？」

チコは、首を横に振る。

娘とか言っているが、チョコにとっては、呪いなんぞを使ってくる相手だ。倒しても構わないだろう。

でも、本当に今倒して良いのか……？

いや、今のままではダメだ——僕の中で警報が鳴り響く。

その時、魔王に迫る別の影があつた。

「くっ。魔王とは——今まで俺を騙して……」

ワンテンポ遅いグスタフ。

彼は剣を抜いて迫る。

イマイチ不自然な気もするけど、本当に騙されていたのなら、この行動もあり得るかもしれない。

「【剣聖】スキル発動！」

グスタフは、魔王に迫っていく。

不自然さを覚えつつも、その様子を見守ろうとすると、チコの声が頭に響いた。

『【剣聖】 スキルの起動を感じたけど、どうする？ グリッチする？ それとも——』  
「No!!」

反射的にNoと答えてしまった。

今、魔王を倒すのが本当に正解なのか、まだ分からない。

「グスタフ、待て！ まだ聞きたいことが！ それに、そいつを直接倒してはダメだ」

「お前の指図など受けん！」

「話を聞け！」

【水生成】で足止めする暇もなく、僕の制止を振り切りグスタフは魔王に剣を突き立てた。

腐っても勇者候補だ。

持っている武器も、聖属性の魔力を帯びたものなのだろう。

魔王はゆっくり倒れると、その体が灰のように粉々になっていく。僕には――顔が崩れる寸前に、一瞬ニヤついたようにも見えた。

倒れているカトレーヌさんを見る。

彼女の肌に広がっていく黒い痣――。

チコにかけられた【誓約】。

アンデッド生成も広義では死者を操る呪いの一つとも言える。

そうだ。

この魔王の本質は呪いなのだ。

自らの死と引き換えに強力な呪いを発動するなんて良くある話だ。

僕は粉々になり、宙に舞っていく灰をしばらく見つめていた。

「ライト、片付いたみたいだし、帰ろ？」

「そうだな」

僕たちは、三人で手を？いで帰ろうとするのだが……。

「ちよつと！ ほのぼのしちゃって、アタシを忘れてない？」

僕はすっかり、魔王の術で動けなくなったカトレーヌさんのことを忘れかけていたのだった。



### 第三章 願い

## 第27話 王女殿下の謝罪

魔王が倒され、僕たちは王国——ブラード王国が用意した馬車で、出発の準備をしていた。

僕らは身だしなみを整えると、馬車に乗り込む。

「いやー、リイト君、助かった。さすがね、ありがとう」

「【清浄化】のレベル2グリッチは呪いを解除する……呪いという魔法を体から切り離す魔法のようです」

「呪いね……」

カトレーヌさんは僕の左側にぴったりくっついて座った。

「チコちゃんも【誓約】解いてもらってよかったね！」

「うん！ リイト、ありがとう！」

右側にはチコが座る。

チコは少し遠慮していたようだけど、僕らの態度が変わらないのを感じ安心したようだ。

正面には、ふくれ面をしたマエリスがいた。

「どうせ、私は、【解呪】の魔法はまだ未習得ですよー」

「もう、拗ねんなって」

「拗ねてなんかないわよ……」

「ふう……。まあ、落ち着いたら、三人でパーティ組もうな」

「えっ？ うん、そうよね！ それならっ！」

急にニコニコし始めるマエリス。

僕は、それを見て不安になった。

ちよろい。

変な男に騙されないように、よく見張っておく必要があるそうだ。

そして、その隣におわすのは――。

「ボリスの謀反……聖女の誘拐に、わたくしの暗殺計画まで――」

我がブラード王国のレナ王女殿下だ。

豪華で威厳があつて、キラキラしたドレスを身につけていらつしやる。

初めてお目にかかったのだけど、住む世界が違ふなあと改めて感じさせられた。

「お姫さまー！」

チコも興味深そうにしている。

「それで、魔王は、勇者候補のグスタフ殿が倒されたと」

「まあ、殆どライト君が倒したようなものですけどね」

カトレーヌさんが伝える。

グスタッフもボリスの指示に従っていたことを伝えておく。ただ、騙されたと主張する可能性も高い。

勇者候補は貴重であるので、そう簡単に処罰は下されないかもしれない。

「事情は、だいたい把握いたしました」

レナ姫殿下は、僕の手を取った。

「その、これからどうされるのでしょうか？」

「どうって……、そうですね、あまり考えておりませんが」

ちらりとマエリスとチコを見る。

「もし許されるなら、マエリスとチコと一緒にパーティを組めたらと」

「なるほど。問題ありませんし、今後王国直属のパーティとして依頼を受けて頂ければと」

「ほ、僕らがですか？」

「はい。まさか、あなたが追放されていたとは思わず……申しわけありませんでした」

姫殿下が謝罪をした。

「どうやら、僕が王国外に出てしまうことを心配していたようだ。」

「まだまだ強くなれそうだし、報酬も間違い無いわけだから、王国の依頼をこなすのも悪くないかもしれない。」

「それに、あの魔王があんなに簡単に滅んだとも思えない。」

「必ずチコを奪いに来るはずだ。」

「いえいえ、僕は大丈夫です」

「寛大な配慮、ありがとうございます、では、これから王都へ——」

王女殿下が出発の号令をかけようとした、その時。

「リイト様、リイト様ですね！」

見かけない色の馬車がやってきて僕が乗っている馬車の隣に止まった。

紋章を見ると、どうやら隣のアルハーデン王国のものだ。

馬車から飛び降りた女の子が駆け寄ってくる。

護衛の兵士が、それを阻止しようとするが、あっけなく突破。

これまた豪華なドレス姿の女の子だけど、こっちはお転婆というか、めっちゃ活発な印象。

ドレスが破れないのか心配だ。

護衛は連れていない。

彼女は隣国、アルハーデン王国の王女様のようだ。

「リイト殿、もしよろしければ、我が国に、アルハーデン王国にお越し願えないでしょうか？」

「何を。リイト殿はこれからわたくしども、ブラード王国王都へ向かわれるのです」

「あなた……ブラード王国の王女様ね。ロクに廃墟の管理も、孤児院の街の支援もしていないくせに」

なんとなく噂は聞いていた。

事実だったのか。

「この地域はブラード王国領です。アルハーデンが口出すことではありません。さあ、リイト殿、出発を——」

「冗談じゃないわ！ また、そう言って呼び寄せておきながら追放するのでしょうか！」

「なぜそれをつ。そ、そんなわけ——」

「リイト殿、アルハーデン王国は、そのようなこといたしません。それに、もしいらつしやるのなら、マエリス殿には聖女の、爵位を」

「ポンポンとそのように爵位を授与するなど……」

「リイト殿！ それに……何より、アルハーデンには、グリッチコードに関する文献が（ぎ）あります」

「そんな眉睡な話——さあ、リイト殿！ 出発を！」

あれほど上品だったレナ王女殿下が、やってきたアルハーデンのお姫様に掴みかかる。僕たちの前で、つかみ合いの喧嘩が始まってしまったのだった。

「マエリスとチコはどっちがいい？」

「リイトについていく！」

「お、おう」

僕としては、《グリッチコード》の文献があるというアルハーデン王国の方に興味があつた。

それに――。

「ブレード王女殿下、申し訳ありませんが……僕は一旦アルハーデン王国の方に行つてみたいと思います」

「え……そそそ、そんな」

一瞬にして狼狽える姫殿下。

「きやつ！ 本当？ もうずっとアルハーデンに住まない？」

「うーん、僕はやつぱり、孤児院がある街がいいですし」

「なるほど。じゃあ、あの廃墟と街がある領土を私<sup>アルハーデン</sup>たちのものに――」

「ちよつと、今聞き捨てならない発言が聞こえたような気がしましたが？」



正直なところ、辺境だからと関心がないブラード王国より、廃墟の管理や孤児院への寄付などをしてくれるアルハーデンに属した方が、街としても幸せなのでは……と思っ  
た。

第28話 断罪される勇者(1) — side カト  
レーヌ

「ケツ。なんで俺がアイツの仕事を——」

グスタフが悪態をついている。

今、あたしたちは馬車に揺られ、ディアトリアの廃墟に向かっている。

「王国からの依頼だから仕方ないじゃん。あんただって、汚名返上するために受けたんでしよう?」

「ふん」

馬車の中の空気は冷え切っている。

正面にグスタフ、あたしの隣には、魔法使いのギナがいる。

ギナは、グスタフが連れてきた魔法使いだ。

彼女は無口で、なおかつ自ら行動しようとしなない。

「アンタの行動は全てレナ王女殿下に伝えることになってるから。変な気起こさないで」

「へいへい」

あたしは、パーテイメンバーと勇者候補のグスタフの監視役を兼ねていた。

王国騎士ボリスが引き起こした事件。

王国兵士や傭兵を巻き込み、勇者パーテイを誘い……聖女であるマエリスを怪しげな儀式に用いようとした事件。

ボリスを含め、王国に敵対する者達に加担したという疑いが持たれている。

もつとも、本人は騙されていたと証言しているし、勇者候補があまりに貴重であるという理由で処遇は一旦保留となっている。

事件までは、勇者候補という身分を盾に、ある程度自由にしてきたグスタフ。

裏で何をしていたのかは分からないが、今ではあたしや他にも監視役がいる。

もう、扱いは犯罪者のそれだった。

馬車に揺られながら、アタシは先日のことを思い出す――。

レナ王女殿下と勇者候補グスタフが、王城の会議室で話をするらしい。

アタシも参加を促され、同席することになる。

その場で行われたのは、グスタフに対する断罪だった。

「グスタフ殿。あなたには、大変失望しました」

「ハッ……いえ……あれは」

グスタフは、しどろもどろになっている。

「ライト殿をパーティから追放したのは、大きな失敗でしたね。彼はこの国から出て行ってしまいました」

王女殿下の引き留めも叶わず、ライト君は隣国に行くと言った。

静かに話している姫殿下の声は低く、怒りをぐつと押さえているようだ。

「いえ、アイツは……役に立たずで——」

ダンッ

ついに、レナ王女殿下が机に拳をぶつけ、大きな音を立てた。

「ひうっ」

グスタフはびっくりしたのだろう。

小さな悲鳴を上げた。

権力にはとことん弱いようだ。

「そ、それにパーティの戦力を——」

「はあ……」

レナ王女殿下は、溜息をつきグスタフの言い訳を流した。

既に対話になっていない。

それほどの怒りなのだろう。

これは、この様子は……もはや断罪だけでは済まないだろうとアタシは感じていた。

第29話 断罪される勇者(2) — side カト  
レーヌ

そこには、王女殿下が何かするたびに、ビクビクするグスタフの姿があった。

「ひっ」

「あなたは気付かなかったのですか？ 彼がいたことで、スキルの発動が楽に行えたことに」

「はっ？ まさか？」

グスタフの返事に、溜息をつく王女殿下。

「はあ……」

「し、失礼しました……き、気付きませんでした」

「わたしが暗殺でもされれば、このように責め立てられなかったでしょうね？」

暗殺計画の存在自体、実はグスタフは知らなかった。だが、その疑いが向けられていることに気付き彼は青ざめる。

「……ッ！　いえ、暗殺などともんでもない」

結局、そう否定するしかなかった。

彼にとつて幸いだったのか不幸だったかは分からないが、ボリスの計画を知る者は全て命を落としていた。

勇者パーティや聖女に付き添った兵士や傭兵は、護衛を依頼されていただけで、事件の真相を未だに知らない者も多い。

グスタフが騙されていたのかどうかは、それを判断するほどの証拠を王国サイドは持ち合わせていない。

もつとも、強権を使って疑いだけで処刑することは可能だ。

しかし、ライトを失った今、王国サイドはこの勇者候補に頼るしかない。

それが、グスタフの命を少しだけ延ばすことに繋がった。

「あなたには、本来ライト殿に行つていただく予定だった調査を代理として勤めていた



「だきます」

「ハッ、承知しました」

これで終わりか、と、グスタフは胸をなで下ろした。

しかし、王女殿下の怒りがこれで治まるはずもなく。

王女殿下は、その怒りと、信用がやや損なわれている者に対する待遇を考えた。

「グスタフ殿。あなたは私の信頼を失っています。そのため——」

王女殿下が合図すると、呪術師が儀式を行うような道具を持って入ってきた。

こ、れ、は。

「( ) ……この儀式は……【誓約】<sup>ギアス</sup>の儀式」

「はい。さすがにご存じですね。我が王国が誇る呪術師による、最高級の【誓約】を結ばせていただきます——」

その後、アタシはグスタフの叫び声をしばらく聞く羽目になる。

本来【誓約】の魔法を課すときは多少の苦痛を伴う。  
しかし、さすが対勇者用だ。  
最高級の術は最高級の苦痛を与えていく。

「ギャアアアアアア……」

「はあ……お、終わった……」

「……!! お、おい……【誓約】は一つじゃないのか？ おかわりとかいらなからつ！  
やめろ……やめてくれ……ぎやああああ……」

勇者候補の悲鳴は、その日の午後、ずっと王城に響いていたという――。

## 第30話 【軽修理】の魔法で服を改造してみよう

僕らは一路、アルハーデン王国に向かうことになった。

ここで、カトレーヌさんとは別れることになる。

カトレーヌさんは、ブラード王都に戻りパーティを組み直し、もともと僕が受ける予定だった依頼を請け負うようだ。

僕らは馬車に揺られ、アルハーデンの王都に到着した。

僕は王宮内に滞在して良いということで、甘えることにした。  
かなり広い二人部屋を用意された。

チコと一緒だ。

「ライト、ふかふか！」

「うん、すごいベッドだね」

「お風呂もある！ リイト、一緒にはいる？」

バスルームまであつて至れり尽くせりで。

僕らはその豪華さに驚いたのだった。

「リイト、マエリスは？」

「マエリスは神殿の方に住むらしい」

神殿と行つても王城のすぐ近くにあり、歩いてすぐのところだ。

「一緒に住まないのお？」

「いや、さすがに未婚の男女が、しかも聖女と一緒に男が住むってマズイらしくって」

チコはしよんぼりとした。

「そうなの？ 一緒に住めば良いのに」

「もう、孤児院のように一緒にワケには行かないからなあ」

小さな頃は、少し狭いところで、マエリスや孤児たちと一緒に雑魚寝をしていた。

目を覚ますと、いつのまにかマエリスは隣にいて。

互いの温もりが気持ちよくて、なかなか起きられない朝を迎える。

僕はずっと、そんな生活が続くと思っていた。

「ねえ、リイト……一緒に寝てもいい？」

「そろそろ一人で寝ても——ううん、いいよ」

「わーい！」

聖女という存在は、この国ではとてつもなく貴重なのだという。

マエリス、遠い存在になったな。

などと思いつながらチコと一緒にその晩は眠った。

しかし、翌日。

ドアをドンドンとノックする者がいた。

寝ぼけ眼で出ると……。

「ライト、チョコ！ 王都に遊びに行こ！」

以前と全く変わらないマエリスがやってきて、僕たちは久しぶりの休暇をアルハーデンの王都で堪能することになったのだった。

三人で美味しいものを食べたり、小物を買ったり。

一通り楽しんで、僕の部屋に三人で戻った。

早速、お店で買った服を並べてみる。

新品だというのに、どこかにひっかけたのか糸がほつれている服があった。こういうときのための生活魔法、【軽修理】だ。

さっと使い、直してしまおうと僕はあることをひらめく。

「ねえ、マエリス、チョコ。冒険に着ていく服を選んでみて」

「え？ うーん、私はやっぱり聖女着になるかしら。可愛いのも良いけど」  
「わたしは——これ！」

チコは花柄のワンピースを選んだ。

マエリスが選んであげたもので、着たらとても可愛らしく似合うだろう。

「メンディング【軽修理】！」 『グリッチ』

『【軽修理】の魔法はレベル2のグリッチも行えるよ』

マエリスとチコの服それぞれに魔法を施す。

さっそく【識別】してみよう。

名前：聖女着

防御力：中

←

名前：神聖・聖女着

防御力：高

効果：

聖属性魔法 効果増強

呪い耐性 高

↳

おお。なかなかの効果アップだ。

しかも、聖女着の見た目も、豪華になっているような。

次はチコの服だ。

名前：花柄のワンピース

防御力：低

←

名前：花柄のキャミワンピース

防御力：中

呪い耐性： 呪い無効

↳

デザインが変わって布の面積が減っているけど、他の服と合わせて着ても良いと思う。



「ねえ、リイト、これどう？」

「いいと思うよ」

「じゃあ、これは？」

「ちよつとスカート短くない？」

「えーかわいいのに」

マエリスは、ファッションショーみたいに色々着ては、僕に見せに来た。チコは、着る様子もなく、ニコニコとしてワンピースを抱き締めている。

「チコは着ないのか？」

「うふふ……もったいなくて着れないよ……ふふ」

とても嬉しそうで、笑ってしまうのを押しえられないようだ。

でも、どうせなら――。

「着てくれたら、僕もマエリスも喜ぶよ？」

「じゃあ……じゃあ、明日、着るー！」

ずっとぎゅつと抱き締めているので、しわになると言おうとしたけどやめた。  
しわになったら、【メンディング軽修理】の魔法で直してあげれば良いのだ。

その日。

チコは、キャミワンピースを抱き締めたまま、にこにことして眠ったのだった。

## 第31話 王女殿下に招かれて

「いらつしやい、リイト殿にマエリス殿、そしてチコ殿」

「失礼します」

僕たちは、グリッチコードの文献を読むため、王女殿下の自室にお邪魔していた。その部屋は、僕に与えられた部屋より質素にも見えた。

「あら、マエリス殿の聖女着もチコ殿の服も、とても可愛らしい」

「はい——リイトにお願いしたら、このように大変かわいく仕立てて貰えたんです」

マエリスは本当に嬉しそうに、服を見つめて言った。

「なるほど、これが生活魔法ですか……素敵ですわ。リイト殿、もしよければ、わたくしに生活魔法を見せていただくことはできたりしませんか？」

「はあ……僕は構いません……【清浄化】！」

僕は殿下に向かって、魔法を唱える。

女性なら、この魔法はまちがいでなく喜んでもらえる。

魔法が発動し、彼女の全身に魔法の泡が現れた。

「ああつ……ああ、こ……これは……気持ちよいですね」

「はい、みなさそう仰られます」

殿下は泡が消えると、クンクンと全身を嗅ぎ始めた。

その様子は、おおよそ姫らしくなく……親しみを感じる。

「あつ、失礼しました……素晴らしい魔法ですね」

「あまり見られたことがないのでですか？」

「はい。この国の者で生活魔法を使える者はかなり珍しいのです。魔法は、皆が使えるのですが」

そう言つて、彼女は耳を出した。

帽子をかぶつていらつしやつただけど、それを取り露わになつた耳は上を向いて尖つてゐる。

「エルフ——」

僕はつい、言つてしまつてから慌てて口を押さえた。

「はい。わたくしは……この国の王族は、殆どがエルフなのです。とはいえ、普段は人間に偽装しているのですが」

「なるほど。存じ上げませんでした」

王女殿下は「さて」と言つて一冊の本を壁際の本棚から撮りだし、僕たちが座つてゐる椅子の前のテーブルに置いた。

「これが、グリッチコードについて書かれた古い書物です」

本には、見たことのない文字が描かれている。  
まったく読めなかった。

「なんと書いてあるのですか？」

「私どもも、この文字は殆ど読めず今解読をしているところなのです。そのおかげで一部解読が出来た部分があります」

すると、王女殿下は目をつぶり、ぽつりぽつりと喋った。

「反則たる呪術の根源は、古の都にあり」

「反則たる呪術の骨身は、空の都にあり」

どういう意味だろう？

このグリッチコードの、力の源がどこかの……古都にある？

「その言葉と共に描かれているのが、この……魔方陣なのです。この魔方陣自体が、古の都を指しているようなのですが……」

そう言つて王女殿下は、書物のページを指さした。  
そこには円形の魔方陣が描かれている。

「もしかして——」

僕は、一つ気になつていた呪文があつた。

今までグリッチをしたことがない魔法の一つ【伝言】<sup>メッセージ</sup>。

この魔法を使えば読めない文字が読めるとか、書物に何か変化が現れるのではないだろうか？

まあ、予想がハズレていても不都合はない。

【伝言】<sup>メッセージ</sup>！』『グリッチ！』

『【伝言】を解析するね——成功！——反則強化<sup>グ</sup>する？』<sup>リッチ</sup>

「YES!!」

「成功したよ！」

呪文が適用され、本が光り輝く。

そして、近くの床が輝き始める。

そこに現れたのは――。

「「転移魔方陣!!」」

皆がびっくりして、床に現れた転移魔方陣を見つめた。

円形のそれは、わずかに光を放っている。

「こんな仕掛けがあつたなんて、驚きです」

「ええ。試してみるものですね」

「今のが、『グリッチコード』なのですね？」

「はい。一旦通常の魔法を唱えてそれを反則強化グリッチする形で使います。どうやら、それ以外のこともできるようですが、今は強化のみです」

「これからも楽しみですね」

「はい!」

「それで、どうされます? この魔方陣……」



そうだ。

王女殿下の床にとんでもないものを作ってしまった。

とはいえ、一定時間経てば消えるだろうけど。

「古き都——。どこのことでしょうか？　これに乗ると、恐らくそこに転移されるのですよね」

「はい。たぶん」

「チコを狙って魔王がまた攻撃してくると僕は考えています。そのために、力がもつと欲しい——だったら、行くしかないかなと。マエリスとチコは——」

とりあえず僕が様子を見てくるから、待っててと言おうとした。  
しかし……。

「もちろん、リイトに付いていく」

「お、おう、息びったりだな」

その様子を見て、王女殿下もクスツとされた。

「恐らく、転移魔方陣の向こうには帰る魔方陣があるはずですが、無理をなさらず、危険な場合はすぐに戻ってください」

「はいー」

## 第32話 記憶を辿って

僕らは転移魔方陣使って「古の都」いにしえに到着した。

「うーん……気持ちいい」

マエリスが伸びをして、チコもマネをするように、うーん、と伸びている。

「空は晴れてるし、すがすがしい気分だね」

「でも、周りは崩れた建物の跡がばかりだ」

僕らは周囲を見渡した。

魔物などの気配はない。

「でも、ここは……？ どこかで見えたような？」

僕は、妙な既視感を感じていた。  
懐かしい、そんな雰囲気。

「リイト、ここ……この前来たよ」

「えっ？　なんだったって？」

「ここ、ディアトリアの廃墟だ」

確かにそう言われると、崩れた建物の跡といい、道といい……見覚えがある。  
生まれ故郷のディアトリアの村……の廃墟だ。

「じゃあ、僕らって、元々《グリッチIIコード》に縁があつた？」

「そうなのかな？　でも、リイトもこの前来てたはずなのに、すぐ分からなかった？」  
「前来たところは違うような気がしたんだよな。なあ、チョコ？」

チョコは、辺りをキョロキョロしている。

「ねえ、リイトは……リイトの家はどこ？」

チコはついさつきまでニコニコしていたけど、今は真剣な表情になって言った。  
うちの家か。

そうだな、案内しておくか。

「こつちだよ」

僕は、チコの手を引いて、ダイアトリアの廃墟を歩いて行く。  
家は、村の中心部に近い。

「こつちだよ」

石造りの家だったけど、もうほとんど崩れてしまっている。

「そういえば、ライト、地下ってまだあるのかな?」

「地下はそのままなんじゃないかな?」

マエリスの疑問に答えた。

あの場所……マエリスと、しばらく二人で過ごした場所。

ここに来て、思いだしたのかもしれない。

僕は、崩れた家の中に入る。

砂をかき分けていくと、鉄製の蓋が見つかった。

ボロボロになっているけど、蓋としての機能はまだ果たしていた。

開けると、下に続く階段が現れる。

「降りてみよう。気をつけて。」  
【光】<sup>ライト</sup>

僕は、地下に入っていく。

十年前、この村が災厄——とてつもない爆発に襲われたとき、僕とマエリスは、たまたま、この地下に迷い込んでいた。

あの日、この地下に迷い込まなかったら、僕とマエリスは生きていなかっただろう。

この村の地下には、魔物などはいないものの、ダンジョンのようなものがあつたのだ。救助がくるまで、僕とマエリスはずっとこの地下で、うずくまっていた。

「じゃあ、あがろうか？」

「……」

「ん？ チコ？」

「あ、うん、上がる！」

ニコニコしていたチコが、急に真剣な顔になったような気がした。

地上に戻り、特に何も見つからないので転移魔方陣まで一旦戻ることにした。  
したのだけど……。

誰かが走ってくる足音が聞こえてきた。  
誰だ？

僕らは姿を隠し、息を潜めた。

緊張が増し、三人とも自然に寄り添う。

「あ、あの人——カトレーヌさん？」

「それに、ギナ？」

「誰かに追われてるのかな？ あ……」

視界に入ったのは、僕が会いたくないと思っていた人物。

黒いオーラをまとった、勇者候補——グスタフだった。



第33話 蘇る記憶と願い — side チコ

わたしは、チコと呼ばれている。

そのわたしは、今、大好きな二人……リイトとマエリスと、ディアトリアの廃墟の地  
下にやってきている。

ここに来て、わたしはこの二人と会った時の記憶がはつきりと蘇った。  
精神と実体がバラバラになった時から、ぼんやりとしていた記憶——。

わたしが、チコではなく、誰かから《グリッチコード》と呼ばれていた頃。  
今から、十年前のある日のこと。

ある晴れた日のこと。

わたしの見た目は、人間の六歳くらいの女の子に見えるらしい。

その容姿を利用され、わたしは警戒されずにいろんなところに送り込まれていた。その日。

——わたしは、村の中心部に向かえという命令を受けていた。

この、ディアトリアと呼ばれる村の中心部に。

昼間の村はとても賑やかだった。

いろんな人の話す声が聞こえる。

「やあ、いらつしやい」

「今日は良い天気だね〜！ この肉団子はどうかね？」

「じゃあ、マエリスに買って行ってやるか」

晴れ渡る空に、色塗られ、飾られた建物。

今日、この村はお祭りをしているようだ。

「わーい！」

「わーいわーい！」

子供たちが走り回っている。

わたしは、彼らに声をかけることはできない。

躑シツで、わたしは喋ることを禁じられていた。

魔法で、強制的に。

喋ると、体に痛みが走るのだ。

もつとも、例えば痛みが走っても、顔に出さない程度には我慢が出来るようになっていた。

——わたしは、この村の中心部に向かえという命令を受けていた。

そんなわたしに……。

「ねえ、君！ 見かけない顔だね？」

「ライトお、どうしたの？」

六歳くらいの男の子と女の子が話しかけてきた。

くりつとした瞳と明るい色の髪の毛の男の子。  
少し長い髪の毛で、落ち着いた感じの女の子。  
でも、わたしは答えられない。  
口をうごかさうとも思わない。

「ねえ、どうしてそんなに綺麗な髪をしているの？」

「もう、ライト、なんぼはしちやダメだよ？」

「なんぼ？ マエリス、なんぼって何？」

わたしの前に立って、話し始めるふたり。

通せんぼされたように感じる。

だから、無視して歩き始めようとした。

だけど……。

ここでハツとした。

村の中心部ってどっちだ？

分からなくなった。

「どうしたの？ キョロキョロして」

「ねえライト、もしかしてこの子、迷ったんじゃない？」

「それはたいへんだ！」

わたしはしやべってないのに、この二人は魔法使いか何か？

迷ってしまったことを当てられてしまった。

「えっ？」

男の子と女の子は、強引にわたしの手を取り、引つ張っていく。

どこへいくのだろう？

この時、わたしは二人の指に何かあることに気付く。

男の子と女の子の指にはそれぞれ、お揃いそろの指輪が光っていた。

「ねえ、ライト。どこへ行くの？」

「とりあえず、僕の家に行こう？」

「どうして？」

「お父さんとお母さんにそうだんしよう」

「そうね、それがいいわ」

二人は有無を言わずにわたしの手を引つ張つていく。

少し引きずられるようにして、わたしは二人の後をついていった。

その道中、わたしは道の端で売られている星の形をしたものに目を奪われて、立ち止まった。

男の子がわたしの見ているものに気付く。

「ねえ、マエリス、これ星の形をしてて綺麗だね」

「これは、ホーリアアミュレット聖なるお守りつていうのよ」

「じゃあ、これ君にあげる！」

「じゃあ、私も半分お金出す」

露天商の人から二人はお守りを受け取ると、わたしにくれた。星の形をしたそれは、私の手の中に収まる。

「それで、私にはないの？」

「あとで、お揃いのを買おう」

「えっ、うん！ 楽しみ」

女の子は男の子の言葉にニコニコしはじめた。

わたしは、星の形をしたお守りを胸に抱き締めるように抱える。

不思議な感覚がわたしの奥からじわつと湧き上がった。

温かい。

誰かにこうやって、ものを貰ったのは初めてだ。

——温かい。

「ねえマエリス、これ美味しそうだね？」

「買い食いしちやダメなのにー」

「今日はお祭りだよ？」

「じゃあ、ゆるす！」

二人は、肉が刺さった棒を買い、わたしに一本渡してきた。

二人の真似をして、口に入れる。  
不思議な感覚が、口の辺りに広がった。

「おいしいね」

「うん、おいしい」

これが、おいしいって感覚？

口がとろけそうになり、驚いた。

でも、それは決して嫌なかんじではなくて。

わたしはまた口にしてみたいと思った。

——温かい……。

「君……とても笑顔が良いね」

「リイトお。なんぱはだめだよお？」

「マエリスも、そう思わない？」

「……かわいい。思う」



二人がわたしを見つめて、笑顔になっている。  
なぜだろう。

体の中心が、ぼかぼかする——。

——温かい。

この男の子と女の子は……この心地よい感じを与えてくれる……やっぱり魔法使いなの？

「じゃーん。ここが村の中心です」

「村の中心！」

「僕の家はもうすぐだからね」

村の中心——。

——わたしは、村の中心部に向かえという命令を受けていた。

そうだ。

わたしは……。

わたしは……。

——わたしは、村の中心部に向かえという命令を受けていた。

中心に到達したという事実が起点となり、わたしの【誓約】が起動する。  
イヤだ。

でも、どんなに拒否しようとしても、わたしの口から呪文が漏れ出す。

わたしは初めて【誓約】に抵抗した。

しかし、口を押さえても何をしてもしまらなかった。

「【魔流星】！」

「《グリツチコード》」

「【魔流星】！」

「《グリツチコード》」

わたしが発動した呪文により、晴天だった空が突如暗くなる。

そして、山のように巨大な無数の火の玉が、村に降り注いだ——。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……ドオオオオオオオン!!

何倍にも強化された魔法は、村を焼き尽くし破壊を尽くした。

建物をバラバラにし、人を爆風で焼き、命を奪っていく。

火の手があちこちから上がり、村の景色が一変した。

あちこちから、悲鳴が聞こえる。

イヤだ……イヤだ!

わたしは魔法的存在だ。

だから、周囲がどのような状況でも影響は少ない。

でも無情に……時だけが過ぎていく。

わたしはさつきまで接していた人々が燃え尽きるまで、ただただ、突っ立ったまま、その景色を眺めていた。

眺めることしか出来なかった。

こんな光景は何度も見たことがある。

わたしは……イヤだった。

イヤだったのに。

時が経ち――。

地獄の炎が去り、雨が降ってきた。

わたしは雨の中、呆然として立ち尽くしていた。

星の形をしたお守りを胸に抱いて。

涙なのか……雨なのかわからないものが、わたしの頬を伝う。

「あれ……っ？」

目の前に、六歳くらいの……男の子と女の子の亡骸なきがらがあることに気付いた。

いつからあったのだろうか？

男の子と女の子は、寄り添うように抱きあつて最後を迎えていた。

男の子と女の子の子の？ いだ指には、お揃いそろの指輪が……黒ずんで、光を失って……。

「うわああああああああああああああああ!!」

「【願<sup>wish</sup>い】」

《《グリッチコード》》

「起動に失敗しました」

「【願<sup>wish</sup>い】」

《《グリッチコード》》

「起動に失敗しました」

「【願<sup>wish</sup>い】……」

わたしは——古代魔法の一つ、「【願<sup>wish</sup>い】」の呪文を繰り返し唱えていた。

世界を書き換え、願いを叶える魔法。

起動する確率が低すぎて、破棄された魔法。

わたしは——ただ、その魔法を唱えるだけの存在になっていた。

【願い】

《グリッチコード》

「起動に失敗しました」

【願い】

《グリッチコード》

「起動に失敗しました」

【願い】……」

大変な力を持つ魔法使いが一生に一回だけやっと起動できる魔法だ。

でも、わたしは魔法的存在だ。

何度でも唱えることができる。

呪文を唱える度に、躰が発動した時のような痛みが毎回走る。その痛みのおかげで少しは胸の痛みを少しだけ忘れることができた。

わたしは呪文を何日も何日も唱え続けた。まるで、亡きものに手向ける祈りのように。

そして……。  
ついに……。

「【願い】」

「《グリツチコード》」

「起動に成功しました」

無限に続くと思ったその詠唱も、やっと終わりを迎えた。

わたしは早速、願いを思い浮かべる。

ついに古代魔法【<sup>wish</sup>願い】が起動したのだ。

《グリッチコードにより、二回分の願いを叶えることが可能です》

「わたしを、いなかっただけにしてください！」

わたしは、願いを込めて言った。

しかし……。

《魔力が足りません。古の過去に干渉する願いを叶えるためには、あと十年の魔力の蓄積が必要です》

「そんな……」

絶望なんてしてられない。

だったら——。

「せめて……あの男の子と女の子が……あの日、安全なところに行くようにしてください。おねがいします。どうか、どうか——！」

せめて、これだけは——。



《魔力が少し足りません》

そんな……そんな！

絶望に飲み込まれそうになる。

《ですが、あなたの精神と実体を分解し魔力に変え、過去の男の子と女の子に提供し、二人を操ることで、願いを叶えることが可能です。よろしいですか？》

なんと、条件つきで叶えられるという。

やったあああ！

二つ目の願いが叶えられる！

わたしがどんな形になったとしても。

またあの男の子と女の子に——！！

「YES!!!」

その瞬間から、わたしのからだ時間がかけて魔力に還元されていく。痛みはない。

願いが叶うなら……わたしなんてどうなっても――。

そしていつか。

最初の……ううん、最期の願い。

「わたしを、いなかったことにしてください」

この願いが叶えられたら。

あの日、あの最悪な魔法もなかったことになる。

男の子と女の子の両親も、村の人も。

みんなが生きることになる。

そうしたら男の子リイトと女の子マエリスにさよならをして……。

いつのまにか、消えてしまえたら。

あともう少し。  
願いは、きつと叶うんだ。

第34話 立ち向かう意思(1) 〽VS 勇者候補  
スタッフ 魔王〽

現れた勇者候補は、何者かに操られているようにも見える。

カトレーヌさんともう一人の女の子を恐ろしい形相で襲おうとしているようだ。

「ライト、どうする?」

マエリスが聞いてきた。

このまま隠れていれば、やり過ごせそうだ。

でも……カトレーヌさんと、魔法使いのギナという女の子は負傷している様子。

このまま見捨てることはできない。

正面切つて勇者と戦うのは大変だけど。

やるしかない。

それに、あの黒いオーラは見覚えがある。

多分、以前地下のダンジョンで遭遇した魔王だ。

自称だけど。

「戦おう」

「はい！」

使える魔法を確認しておこう。

リイト、使える魔法は以下の通りだよ。  
全てグリッチ可能。

■火属性

イグニッション

【発火】

■水属性

クリエイトウォーター

【水生成】

■風属性

ウインド

【風】

■無属性

【鏡】

ミラー

トウルーストライク  
【百発百中】

ソーマタージ  
【小奇跡】

アイデンティファイ  
【識別】

メッセージ  
【清浄化】（グリッチで聖属性）

メンディング  
【伝言】

ライト  
【軽修理】（グリッチで土属性）

クリエイトフード  
【光】

『【食料生成】』

僕は先頭を切って、カトレーヌさんとグスタフの間に割って入る。

「カトレーヌさん、僕たちが戦います。どこかに隠れて！」

「う、うん！」

『先制攻撃！』  
イグニッション  
【発火】『グリッチコード！』

火の玉が、グスタフを襲う。

しかし、まったく効かなかった。

「対策されているのか、そもそも魔法が効かないのか？」

「おや。ライトじゃないか？」

「ああ。グスタフ、どうした？ その体は」

勇者候補の体中から、黒いオーラが湧き出ている。

「グスタフ、魔王に憑依されたか？ あのボリスと同じように」

「ハッ。俺様がそんな間抜けなことになると思ったのか？」

「何？」

「アイツの力を、俺様が吸収したのさ」

彼の腕に描かれた魔方陣から、黒い煙のオーラが立ち上っている。

「ライト、お前のことはずっと気に食わなかった。ここで、お前を殺して、マエリスをい  
ただく」

「いやよ……ライトが負けるはずない！」

剣を抜き僕に対して構えるグスタフ。  
剣聖スキルを使うつもりなのだろう。

「【剣聖】！」

グスタフのスキルが起動。

さすがに、マトモに剣を受けるのはマズイ。

「【鏡】！」『グリッチコード！』

「遅い！ オラアッ！」

グスタフがニヤリとして僕の姿に向けて剣を振る。

しかし、それは空を切った。

スカッ。

「はっ？」



魔法で生成された鏡に写った僕の像が一つ消え、代わりにグスタフの周りに、数十もの僕の姿が現れた。

よし、これで少し時間が稼げるだろう。

グスタフは、目に映るニセモノと本物の区別が付かないようだ。

僕ら、マエリスとチコは少し距離をとった。

「クソっ、どうなっている?」

グスタフが焦り出す。

いくら、僕の姿を切っても、次々と鏡像——僕の姿が増えていく。

もしかして、アイツ一生このまま続けるつもりなのか?

しかし、そう思ったのも束の間。

「はあ、主さんは、なにをしているのでありんすか?」

以前聞いた、魔王の声が聞こえた。

女性の艶のある声だ。

「任せておくんなんし……」  
【魔法解呪】デイスベルマツク

呪文を唱える声が聞こえたと思ったら、すぐに発動し、全ての鏡像が消え去った。

「ひさしぶりでありんすね。グリッチコード使いに、聖女殿、そして……《グリッチコード》」

グスタフの中の魔王は、そう言っただけでチコを見つめた。

「《グリッチコード》。こちらに来なんし」

しかし前回と違い、チコはにらみ返す。

彼女は、強い意志を持ち、まったく怯んでいないように見えた。

第35話 立ち向かう意思(2) ~VS 勇者候補 グ

スタッフ 魔王く

「いやッ！」

魔王の呼びかけを、チコは拒否する。

「親に向かってその態度はなんでありんすか？」

「わたしは……もう、あなたの娘でもなんでもない！ わたしは、ライトとマエリスの――」

しかし、彼女はそこで言葉を止めた。

マエリスが、彼女の言葉を拾う。

「チコ——うん、あなたさえよければ。いいのよ」

「ああ、僕も構わないさ」

彼女は一瞬きよとんとして僕らを見た。

すると、少し口元が緩み……すぐに元の凜とした表情に戻る。

「もう、わたしは、あなたと何の関係も無い！」

「はあ、やはりもつと強い躰が必要でありんすね」

魔王が、チコに向けて手をかざす。

前回は、これで【誓約】の呪いがかかってしまった。

しかし――。

パリンとガラスが割れるような音がして、魔王が狼狽える。

「ど、どうして、あちきの呪いが効かねえの？」

「ライトとマエリスに貰った力が――わたしを守ってくれる」

チコが着ている服が、呪いを弾いている。

「ライト、ここには土がある！」

〔メンディング軽修理〕!!〕

『グリッチコード レベル2、軽修理からクラフト技術に変更』

ゴゴゴゴゴ。

地響きと共に、地面のあちこちが、ボコツと盛り上がり、そこから……土人形が現れた。

それらは集合し、もっと大きな土人形を形成していく。

土人形はやたら素早い動きで、魔王となったグスタフとの距離を詰める。

「くっ……《グリッチコード》ッ！」

緩やかな動きで巨大な土人形の動きを躲す魔王だが、それも叶わず、振り下ろされる腕の攻撃が直撃した。

「グッ——はっ」

グスタフの様子がおかしい。

今はグスタフ自身の男の声に戻っている。

取り込んだとか言ってたけど、もしかして意識の奪い合いをしているようだ。

【コール・ライトニング招　雷】

グスタフの魔法……勇者魔法だ。

幸い、最高度の魔法ではない。

「私を忘れないで！」サンクチュアリ【**聖　域**】！」「《グリッチ・コード》」

キイイイイイイイン！

マエリスが結界を張ってくれる。

ありがとう。

魔法で僕らは負ける気はしなかった。

グスタフの剣技系スキルだけ気をつけよう。

僕はさつきから、グスタフから湧き出る黒い炎が気になっていた。

これは……僕の予想が正しければ、不死者が放つ死のオーラだ。

前回、魔王とボリス戦ったときに見えていた。

だとしたら。

アレをやってみよう。

僕がマエリスに合図を送ろうとしたとき――。

「メテオスオーム流星雨！」

グスタフの指先から、巨大な燃えさかる岩が飛んでくる。

だが、これくらいマエリスの結界があれば耐えられる。

そう思ったのだけど、チコの様子がおかしい。

「い……いや……い……」

マエリスが、「大丈夫大丈夫……」と彼女を抱き締めた。

異常な怯え方をしているチコを見ていると不安になり、僕は土人形を盾として呼び寄せた。

バアアアアアンン——ゴゴゴゴゴゴ。

なんとか、土人形と結界を犠牲としつつも、耐えることができた。そろそろ決着を付けた方が良いだろう。

僕は、マエリスに目で合図を送った。

二人で同時に魔法を打ち、グリツチを行う。

多分、これで勝てる。

僕の魔法と、マエリスのごく一般的な聖女魔法。

「クソッ。【剣聖】【加速】！」

グスタフも勝負に決めて来るようだ。

僕は、チコとマエリスと手を？ぎ、共に呪文を唱えた。



『ソーマタージ小奇跡』！』

『ヒール大治癒』！』

『《グリッチコード》！』

『聖女魔法の『大治癒』をグリッチし、集団魔法化するよ！ 広範囲集団魔法に変化したよ』

『『小奇跡』をグリッチするね。『大治癒』の威力の増強に使うよ！』  
『フルヒール全治癒』になり  
……』

チコの声が震え始めている。

『……それを超えて……えっ？』  
『Raise Dead死者蘇生』に強化された……よ』

『周囲全域……この廃墟の範囲内にいる全員に……『死者蘇生』の……魔……法を』

チコの声が、震えている。

こんなことは今までなかった。

「《レイズ・テッド》だ……と？　超古代魔法じゃ……ない……か……そんな……奇跡……があり」

グスタフも声を震わせている。

僕が「YES」と答える前に、魔法の発動が起きている。

空と地面に見渡す限り、光り輝く魔方陣が現れていた。

色とりどりの線で描かれた巨大な魔方陣は廃墟や地面を彩り、いつか見た祭りの景色を思い出す。

「やめ……！　《レイズ・テッド》など……食らったら、あちきは絶対に……ほろ……ぶ」

剣聖スキルも中断され、グスタフは天地に描かれる魔方陣を見て目を見開き、動けなくなっている。

チコの震える声が……その、喜びと戸惑いと期待が合わさった複雑な心の声が、俺の頭に響く。

『【超<sup>M</sup>広<sup>a</sup>範<sup>s</sup>圍<sup>s</sup>集<sup>s</sup>団・死<sup>R</sup>者<sup>a</sup>蘇<sup>s</sup>生<sup>e</sup>】<sup>D</sup>を実行す……る？！』

「  
Y  
E  
S  
!!  
」

# 第36話 最終話 とても嬉しかったし、とてもぽかぽかしてた。

「超広範囲集団・死者蘇生<sup>Raise Dead</sup>」!!!」

呪文が発動した。

桁違いの威力の魔法なのか視界が光の渦に包まれていく。

「ギヤアアアアアアア! ……こんなデタラメな魔法……」

元々グスタフが支配下に入れていたという魔王は、アンデッドなど闇の属性が強かったのだろう。

だから回復魔法が逆転しダメージとなる。

しかも、それが「死者蘇生」ともなると、呪いも残すことなく消え去ってしまう。

気がつけば、たくさんの光の粒を残してグスタフの体は消滅してしまったのだった。

「これ……もしかして、村の人たちが生き返る……？」

マエリスが期待の眼差しで僕を見た。

「どうなのだろう？」

「そんな奇跡……本当にあるのだろうか？」

僕は、ちよつと期待する。

「うっ……うっ……」

泣き声ができる方を見るとチコが号泣していた。

「チコ！ どうした？ もしかして怪我でも？」

「う……ううん……わ……わた」

何かを言おうとしているけど、言葉にならないようだ。

「チコ——」

マエリスがそつとチコを抱き締める。

「大丈夫、大丈夫だよ」

「う……うん」

チコが次第に落ち着く頃には、天地に現れていた魔方陣が少しづつ消え始めていた。

しばらくして、周囲は完全に元に戻った。

しかし、カトレーヌさんと合流して廃墟を探しても蘇生した人を見つけれなかった。

グスタッフと魔王が消え去ったわけだから確かに魔法自体は起動したのだろうけど

……。

復活に時間がかかるのかもしれない。

そう結論づけ僕たちが一旦、帰ろうとした時。

チコが唐突に言った。

「やっぱり、そうだよね……。どうしても願いを叶えてもらわないとダメだよね」

少しだけ震える弱々しい声。

「ん？ どうした？ チコ？」

僕は、チコに問いかけると、瞳に涙を浮かべ彼女は言った。

「ライト、マエリス。今までありがとう。もう、さよならしなきゃ」

「は？ 何言ってるんだ？」

「そうよ。どういうこと？ もうチコを狙う奴はいなくなったんだから。安心して――」

チコは、ううん、そうじゃないのと、悲しげに言う。

「最初から決めてたの。だから、ね……でもね、リイトとマエリスはすぐ忘れちゃうし……そんな顔して悲しまなくても……いいの」

「は？ 忘れる？ バカなことを言うな」

「そうよ！」

しかし、チコに僕たちの声は届かない。

今までになく、頑なに僕らのことを拒否し続ける。

「今まで……。今までね、リイトはずつと優しくして。マエリスもわたしのことを大切に思ってくれて……嬉しかった。だからね、だからこそ……わたしは自分が許せない。いいはいけないの」

「チコ……何を言ってるんだ？ さつきから一体何を？」

「ごめんね。でもね大丈夫。すぐわたしのことを忘れちゃうから。最初からいなかっただけだ。見たいに」



チコは、頑なだった。

自らの涙を指で掬い、諦めたような表情で僕らを見る。

「少しの時間だけど、とても楽しかったし……とても嬉しかったし、とてもぼかぼかしてた。ライト、マエリス——」

僕はチコが何を言おうとしているのか、どういうわけか察してしまった。  
間違い無くもう会えなくなる。

「——ずっと仲良くね………大好きだよ」

チコはくるっと向こう側を向き、

「【願<sup>wish</sup>い】」

聞いたこともない呪文を唱えた。

## 第37話 エピローグ 願いの破棄

何らかの呪文が発動したのを感じた。

チコの唱えた呪文……？

しかし、目を凝らしてもチコの姿が見えない。

消えてしまった。

いや、そもそも、チコはそこにいたのだろうか？

いやいや、目の前にいたはずだ。

僕は混乱する。

「……チコ？ あれ？ どこいった——」

チコがいなくなった。探さないといけない。

ディアトリアの廃墟の外側は荒野が広がっている。

砂と朽ちた建物ばかりのところで、一人で生きていけるはずがない。

どこかに迷い込んだのなら、急いで探さないといけない。  
でも、どこに行つたのか？

手がかりがない。

でも、とにかく探さなくては……！

「……。あれ？ 探すつて……誰を？ 女の子……？」

「ライト、さつき誰かそこにいたよね？」

マエリスが泣きそうな声を上げる。

そうだ。誰かがいた。

えっと、名前は……何だっけ？

チ——。

急激に、頭の中の記憶が揺れているような感覚がある。

でも揺れているのは頭の中だけで、目の前に広がる廃墟は全く変わりが無い。

まるで、さつきまで近くにいた少女だけが消えてしまったようだ。

「\*\*\*\*\*」?

さつき、聞いたこともない呪文を聞いた。  
きつと、それが原因なのだ。

僕は何か大切なものを失おうとしている。

とてつもない喪失感を抱く予感がした。

ぽっかりと胸に穴が開くような感覚。

でも、それすらぼやけてくる。

ダメだ。

このままでは、何か失おうとしていたことすら……全て忘れてしまう。

どうしたらいいのか？

ふと、僕の右手の指にはめられている、マエリスとお揃いの指輪のことが気になった。  
これは……。

鑑定結果

名前：マエリスとお揃いの指輪

材質：不明。

効果：一度失敗したことを、なかったことにできる。

残り使用回数：1回

↳

頭に響いていた声を思い出す。

そうだ、今まで頭の中に響いていた声があつたはずだ。

僕の指輪の力は使えない。

急ごう。

マエリスの手を取る。

彼女の指輪の力なら……！！

「マエリス、ごめん、ちよつと指輪を貸して」

「えっ？ うん！」

僕はマエリスから借りた指輪を【識別】の魔法を使って鑑定する。

## 鑑定結果

名前：リイトとお揃いの指輪

材質：不明。

効果：発動済みのスキルや魔法を、発動前に戻す。

残り使用回数：1回

↳

頭に響く声は、僕自身の声だった。

ん？

最初から、僕の声しか聞こえなかった……？

いや、違う！

マエリスには悪いけど、今やらないと絶対後悔する。

僕はその指輪を天に掲げ、その力を解放する。

「指輪よ！ その効果を発動せよ!! たった今、発動した魔法を——破棄せよ！」

指輪から光が発せられ、世界がぐにやりと歪んだ——。

第38話 エピローグ 幸せな食卓 — side チ

コ

わたしはチコと呼ばれていた存在。

たぶん、もうすこしで……この存在は消える。

頭がぼんやりしていき、消滅していくことを感じ始めたとき。

わたし自身を引き戻そうとする何かを感じた。

《【願い】は、叶う前に戻されました》

えっ？

どういうこと？

わたしは確かに、【願い】の呪文を唱え魔法を起動した。

だけど、それがなかったことに？

前に戻ったのなら、もう一度唱えればいい。

そう思い口を動かそうとしたとき、わたしの意識は深い闇の底に落ちていった。

「チコ……………チコ」

わたしの好きな声が聞こえる。

ハッキリとしていて、でも少しだけ低くて、響く声。

ライトの声。

「チコ、朝だぞお。起きろお」

優しく肩に触れ、優しく揺すつてくれて。

これがきもちいいから、余計眠くなるの。

「はあ、一体誰に似たんだか」



ライトが困っている。

しょうがない、起きよう。

「ン……ライト……おはよ

「チコ、おはよう」

眩しい光が、瞳に飛び込んでくる。

空気は、ほんの少しだけ冷たくて気持ちがいい。

「もうすぐ朝ご飯の準備できるから、着替えたらおいで」

そう言って、ライトは部屋を出て行った。

ここは……私の部屋……？

着替えて、顔を洗って……。

この家は、どこかで見たような気がする。

ああ、そうだ。  
ライトの家だ。

「あら、チコ。おはよう」

「おはよう」

挨拶をして椅子に腰掛ける。

テーブルには、七人分の朝食が準備されていた。

——七人？

えっと、目の前の優しそうなおじさんは……ああ、そうだ。ライトのお父さんだ。  
隣にいる綺麗で優しそうな女の人は、ライトのお母さん。

その隣には、マエリスのお父さんとお母さん。

そして、マエリスとライトが仲良く座っている。

確かにわたし含めると、七人だ。

「……………いただきます……………」

朝ご飯を食べ始める。

サラダに、パンに、たまごに……。

「チコ、足りるかい？」

「うん！」

「おいしい？」

「美味しい！」

みんながわたしのことを見守って、気にしてくれる。

話しながら、楽しく食べる食事はとてもおいしい。

ああそうか。

全てうまくいったんだ。

ライトもマエリスも、すごく笑ってて、幸せそうで。

お父さんもお母さんも生き返って。

ああ、よかった。

本当に……よかった……。

「ごちそうさまでした」

わたしはきれいに全部、朝食を食べ終わった。

「じゃあ、私がお皿片付けるね」

「マエリス、ありがとう。うん、それが終わったら、ライトと外で待っていてくれないか？

チコと話がある」

「うん。分かった」

テーブルには、ライトとマエリスの両親、そしてわたしが残った。

ライトとマエリスがわたしに言う。

「じゃあ、チコ。お話が終わったら、外に出ておいで。マエリスと待っているから」

「チコ、また後でね」

「う、うん」

ライトとマエリスは、仲良く外に出ていった。

室内がしんと静まりかえる。

「——チコちゃん。君には、感謝している」

唐突に、ライトのお父さんが言った。

「感謝？」

「うん。ライトの成長した姿を見られて……本当によかった」

成長した姿。

成長した姿？

わたしが首をかしげていると、マエリスのお父さんが言った。

「だから、君はライトとマエリスと共に生きなさい」

ああ……。

そうか。

全部理解してしまった。

わたしは、ディアトリアの村の人々を生き返させることができなかった。

わたしは、「わたしを、いなかったことにしてください」という願いを叶えられなかった。

涙が、頬を伝うのを感じる。

「いくら古代魔法でも……十年も前の私たちを救うことはできなかったし、君の最後の【願い】は、リイトがなかったことにした」

「……………どうして？ わたしは、いちやいけないの。いたら、あなたたちの命を奪ってしまう。ううん、奪ってしまった。だから、この世界にいちやいけない。もう一度、【願い】の呪文を——」

「いや、それではだめなんだ」

「どうして？」

わたしはこぼれる涙も拭かず、顔を上げて聞いた。

死者蘇生の古代魔法で生き返らせることができなかったのはしょうがないこと。でも、【願い】の魔法をなかつたことにしたのは、なぜ？

「それはね、きみがいなくなっても、私たちの死という事実は変わらないからだ」  
「え……？」

「もし君がいらないなら、第二、第三の君が用意されるだけだ。あの村は、そういう運命だった」

そんな……。

「じゃあ、わたしは……わたしのしたことは、全部無駄だったの？」

「そんなことはない。君がいたから、リイトとマエリスを救うことが出来た」

わたしは、それを聞いて俯く。

「チコちゃん、私たちはね、リイト君とマエリス二人の成長した姿を見て嬉しかった—

「

マエリスのお母さんは、そう言つて、声を弾ませた。

「十六歳になつたマエリスを見る事なんて、不可能だつた。でも、君のおかげで……彼らと話すことすら出来た。これこそ、『小さな奇跡』<sup>thaumaturgy</sup>なのかもしれないね」

マエリスのお父さんが言つた。

でも……でも。

この人たちの命を奪つたのは……わたし。

「わたしは……わたしは……あなたたちの命を奪つてしまつた。わたしだけ、リイトやマエリスと一緒にいて良いなんて——いいわけがない。そんな、幸せなこと」

リイトのお母さんが、わたしの頭に触れ、そつと撫でてくれた。

「チコちゃん。あなたが、二人と一緒に生きてくれるなら、ううん。あなたがいたいと



思ってくれている間、二人の側に、いてくれるなら文句はないわ」

「だから、二人の元に戻りなさい。そして、幸せになりなさい」

「でも……でも……。いちやいけない。いかなかったことにしないといけない」

わたしは混乱する。

彼らにとつて、わたしは仇なのだ。

なのに、感謝されている。

彼らの大切な息子と娘と一緒にいてくれと言われている。

「今の、リイトとマエリスがいるのは、あの出来事があったから。だから、避けられないことだった。なかつたことにはできない」

じゃあ、私はどうすればいいの？

わたしは、涙が止まらなくなった。

「あの二人の子供になりなさい。二人は君を受け入れてくれる。全てを知った上で、君といたいと思っている。だったら、それに甘えても、バチは当たらないだろう？」

「君に罪はない。罪があるとしたら、それを命令した者たちだ。その者たちは、既に滅んだ」

みんなが、わたしを説得しにかかっている。

「だから、私たちも、安心してこの世を離れることが出来る」

「君が救ってくれたから、二人は生き残ることができたのだ。感謝している。君がどれだけライトとマエリスを救うために頑張ったのか、私たちは知っている」

涙がとまらなかった。

彼らが言っていることを、わたしは少しづつ、理解しはじめていた。

「ありがとう。もう、何も心配することはない」

「古代魔法で与えられた、ほんの一時の復活。それも、もうすぐ終わって私たちは消える。君は……二人の元に行けばいい」

理解するのだけど、それでも……。

わたしは——。

「でも、わたしは魔法的な存在だから」

ライトもマエリスも、だからどうしたと言うのだろうか。

それでも、この事実は変わらない。

「本当に魔法に自我が生まれるのだろうか？ もしかしたら、この世界のどこかに……

君の本当の体があるかもしれない。君は、魔法的存在じゃないかもしれない」

「もし必要なら、二人に頼みなさい。私からも話しておく」

「わたしの本当の体……はい」

外で待っていると一言っていたのに、ライトとマエリスが部屋に戻ってきた。

二人はわたしに手を差し出してくる。

わたしは、少し遠慮したけど……しっかりと二人の手を掴む。

「じゃあ、さよならだ。三人とも元気で」

「ああ。父さん。母さん。ありがとうございます」

「さようなら、お父さん、お母さん——」

奇跡が積み重なった刹那の夢の中で。

わたしたちは……その幸せな食卓を後にした——。

## 第39話 エピローグ 《グリッチ=コード》

明るい陽差しに照らされて、僕は目を開ける。

アルハーデン王女殿下の計らいで、二つだったベッドはとても大きな一つのベッドに変更されている。

この大きなふかふかのベッドは、気持ちよすぎてつい寝過ぎてしまう。

右腕の感覚がない。

見ると、僕の右腕を枕にして眠っている人がいる。

……マエリスだ。

いつのまにこの部屋にやってきた？

せっかく別々の部屋を用意して貰ったのに……これでは、孤児院の時と同じじゃないか。

でも、目が覚めて最初に目に入るのが、大切な人の寝顔というのは――。

「ライト、おはよう」

「おはよう」

マエリスが目を覚ます。

僕は思わず、顔を近づけて彼女に唇で触れる。

「う、うーん……すう……すう。リイト……マエリス——」

突然の声にハッとする。

僕とマエリスの間で眠っているのはチコだ。

静かな寝息を立ててよく眠っている様子。

「寝てるよね？ さっきの、見られてないよね？」

マエリスがささやき声で、僕に聞いてくる。

そうだな。

さつきみたいなの、うかつなことは……控えないとな。

「たぶん、大丈夫」

そう答えてまたふとんに肩まで潜る。

二人の体温がきもちいい。

「なあ、マエリス」

「うん？」

「チコと一緒に、三人で——幸せになろうな」

「うん」

そう返事をしたマエリスだけだ。

なぜか急に耳の先まで真っ赤に染めたと思ったら、布団の奥に潜ってしまった。

「えっ？ 今の何？ 何？ リイト？ プロポーズ？」

戸惑いつつ、嬉しそうな声が聞こえる。

今日は、もう少しこのままでいよう。

三人で、着替えて朝食を済ませて外に出る。

同じ部屋からマエリスと出るとき、誰かに見られないかと妙にドキドキした。

「ライト様、おはようございます」

「おはようございます。王女殿下」

「本日のご予定は、なにかございますか？」

「うーん、できれば今日はゆっくり休めたらと思っています」

ディアトリアの廃墟から戻って数週間後、僕らは未だにアルハーデン王国の厄介になつていた。

「そうですか。できたら……各領地の貴族から、様々な陳情が来ておりまして……少し話を聞いていただけたら」

「え？ うーん」



僕がどうしようかと考える素振りをすると、王女殿下が慌て始める。

陳情というのは日照りが続いているので、水を集めて欲しいだとか、武器など強化して欲しいだとか。疫病で死者がでているので、なんとかして欲しいとか。

そんな感じのものだ。

「きよ、今日はごゆつくりしていただいて結構です。また、明日はいかがでしょうか？」  
「じゃあ明日お話を伺いましょう」

「ありがとうございます！ その、私どもは……リイト殿に気持ちよく手助けをしていただくためなら、何でもいたしますので。それと私個人でできることがあれば何なりと言つてくだされば」

「はい、分かりました。何かあればお願いします」

王女殿下からは報酬は直接貴族からもらうように言われていた。

でも大金の管理は面倒だし、その辺りも全部任せている。

どうやら、既に一生食べるのには困らないほど溜まりつつあると聞いている。

爵位を与えるのでこの国の領地を管理してみないかとも言われているけど、まだ気が

向いていない。

それなら孤児院に寄付した方が良い。

まあでも、孤児院にいる子供達の将来を考えると——居場所があつてもいいのかもしれない。

「マエリス、今の暮らしはどう？」

「聖女としてのお勤めは好きだけど——。リイトとチコともつと一緒にいたいな」

「僕もそう思つててさ。前約束したとおり、三人でまた冒険に出かけようか？」

そういうと、ぱあつとマエリスの顔がほころぶ。

待つてましたというような感じだ。

「うん！ チコのこともあるし、いいと思う！」

「そうだな。孤児院にまた顔出してみたいし」

「うんうん！」

マエリスも、今日は聖女のお勤めを休みにして貰っていた。

チコモ勉強を教えてください。ださる講師をつけて貰ったのだけど、今日は休みだ。とりあえず今日は一日、二人と一緒にいてこれからの話をしよう。

僕らは城の外に出た。

「ライト……私行きたいところがあるの」

「わたしも」

「え？ どこ？」

「三人で、ピクニックに出かけたい！」

息びつたりのマエリスと、チコに僕は言う。

僕は、空を見上げる。

「ちよつと曇ってない？」

「それは、ライトがなんとかしてくれるでしょ？」

「なんとかしてー！」

そうだな。

天気を変えるくらい、今の僕にはそれほど難しくない。

川の近くに移動して僕は手を掲げ、呪文を唱えた。

「クリエイトウォーター水生成」！ グリツチ＝コード！」

そうすると……手から水が尋常じゃない量が出始める。

いつのまにかチコが、大きなバケツを用意して水を溜めている。

水をバケツに溜めっていると、周りの家からも続々と人が出てきて行列が出来てしまった。

口々に僕らを見て「魔法術者様だ」「聖女様だ」と話している。

僕らに対して祈りを捧げる人たちもいる。

「気になってたんですけど、そちらの女の子は——お二人の……親族の方ですか？ お子さんにしては大きいですし……」

ふと、集まってきた人の一人に話しかけられた。

チコのことを聞いているのだ。

僕とマエリスは、声を揃え笑って答える。

「いいえ。私たちの娘です！」

水を配り終える頃には空の雲が少なくなっていて、青空が覗いていた。この力は、どこまで強くなるのだろうか。

「——じゃあ、ピクニックに出かけようか」

「うん！」

チコは笑って僕らの前を歩く。

僕は、手を？いでマエリスとついていく。

チコは振り返り、僕らを見てにっこりとして。

以前僕とマエリスが買ってあげた花柄のワンピースが、可愛らしくとてもよく似合っていた——。